

倉賀野長賀寺山古墳

—長屋住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015

高崎市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所

例 言

1. 本書は、長屋住宅建設に伴う倉賀野長賀寺山古墳の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市倉賀野町字橋東 1951 番 2、1951 番 5 に所在している。
3. 発掘調査および整理作業は、事業者・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監理のもと、有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、土地地権者である清塚貞司氏に負担して頂いた。
5. 発掘調査は、田口一郎、小根澤雪絵、大野義人（高崎市教育委員会）の監督のもと、有山徑世（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺構測量を小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。
6. 発掘調査は平成 26 年 12 月 12 日～平成 27 年 2 月 2 日、整理作業は、平成 27 年 4 月 2 日～平成 27 年 6 月 30 日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「617」である。
8. 6 区北側については、その調査を高崎市教育委員会が行い、成果の一部を本書に掲載した。
9. 本書の執筆については I を角田真也（高崎市教育委員会）、それ以外を有山が行った。
10. 本書に関する資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。
【発掘調査】赤尾嘉章 淩川正行 井上正三 柴野光彦 高橋奈緒 松井昭光
【整理作業】大塚規子 合田幸子 國分 文 閣 小百里 武士久美子 伴堀りく
12. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略、順不同）
坂口 一 三浦京子 永井智教 早田 勉 大東建託株式会社

凡 例

1. 掘図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、各掘図中にスケールを付して表示した。
3. 遺構図に使用したトーンについては、各掘図中に明記した。遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。
4. 上層および上器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修 2014）に従っている。
5. 土層説明における含有物の量は、多量（50～30%）・中量（25～15%）・少量（10～5%）・微量（1～3%）と表記した。
6. 遺物観察表に示した計測値の（ ）は復元値、〔 〕は残存値を表す。
7. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いる。
As-A : 浅間 A 怪石、天明 3 (1783) 年降下 As-B : 浅間 B テフラ、天仁元 (1108) 年降下、
Hr-FA : 桜名ニッ岳浜川テフラ、6 世紀初頭 As-C : 浅間 C 怪石、4 世紀初頃
8. 本書掲載の第 1 図および第 4 図は高崎市発行 1/2,500 「高崎市都市計画基本図」、第 2 図は国土地理院発行 1/200,000 地勢図「長野」・「宇都宮」、第 3 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図「高崎」を一部改変引用した。

目 次

例 言		IV	検出された遺構と遺物	8
凡 例		1	概要	8
目 次		2	占墳	11
I 調査に至る経緯	1	3	中近世	21
II 地理的・歴史的環境	2	4	遺構外出土遺物	29
1 地理的環境	2	V	まとめ	34
2 歴史的環境	2	報告書抄録		
III 調査の方法と経過	6	写真図版		
1 調査の方法	6			
2 調査の経過	7			

挿図目次

第1図 調査区位図	1	第12図 3区	15	第23図 4号構(1)	26
第2図 遺跡の位置	2	第13図 5区	17	第24図 4号構(2)	27
第3図 周辺の遺跡	4	第14図 6区石列	18	第25図 4号構出土遺物	27
第4図 周辺の古墳分布図	5	第15図 6区埴輪	18	第26図 4号構(3)	28
第5図 全体図1(古墳)	9	第16図 6区	19	第27図 遺構外(1区)出土遺物	29
第6図 全体図2(古墳以降)	10	第17図 0区出土遺物	21	第28図 遺構外(3区)出土遺物(1)	30
第7図 1区出土遺物	11	第18図 1号昭和7年 / 2号構	22	第29図 遺構外(3区)出土遺物(2)	31
第8図 1区	12	第19図 2号昭和	23	第30図 遺構外(表掲)出土遺物	33
第9図 2区	13	第20図 1号島 / 3号構(1)	24	第31図 断面模式図	34
第10図 2区出土遺物	14	第21図 1号島 / 3号構(2)	25	第32図 境形推定図	35
第11図 3区出土遺物	14	第22図 1号構出土遺物	25	第33図 盛土単位模式図	36
				第34図 金賀野水城	37

挿表目次

第1表 古墳一覧表	5	第5表 6区出土遺物観察表	18	第9表 遺構外出土遺物観察表(2)	32
第2表 1区出土遺物観察表	11	第6表 1号構出土遺物観察表	25	第10表 遺構外出土遺物観察表(3)	33
第3表 2区出土遺物観察表	14	第7表 4号構出土遺物観察表	27		
第4表 3区出土遺物観察表	14	第8表 遺構外出土遺物観察表(1)	30		

写真図版目次

P.L. 1	遺跡の位置と周辺の地形	P.L. 6	6区埴丘盛土断面1、6区埴丘盛土断面2、 6区埴丘盛土断面3、6区埴丘盛土断面4、 6区埴丘盛土断面5
P.L. 2	遺跡遺跡1、遺跡遺跡2	P.L. 7	6区埴輪横出状態、6区陶器全景、6区石列横出状態、 1区壁面、2区2号埴輪全景、3区1号島全景、 3区1号壇跡割り断面
P.L. 3	遺跡全景、1区全景、1区4号構全景、 1区調査状況、1区4号構断面	P.L. 8	1区出土遺物、2区出土遺物、3区出土遺物、 6区出土遺物、1号構出土遺物、4号構出土遺物
P.L. 4	2区全景、2区断面、 3A区4号構全景、3A区4号構断面、3B区4号構全景、 3B区近景、3B区4号構断面、3区3号壇付近全景	P.L. 9	遺構外出土遺物1
P.L. 5	5区埴丘盛土横出状態、5区旧表土横出状態、 5区埴丘盛土断面、6区埴丘盛土横出状態、 6区旧表土横出状態	P.L. 10	遺構外出土遺物2

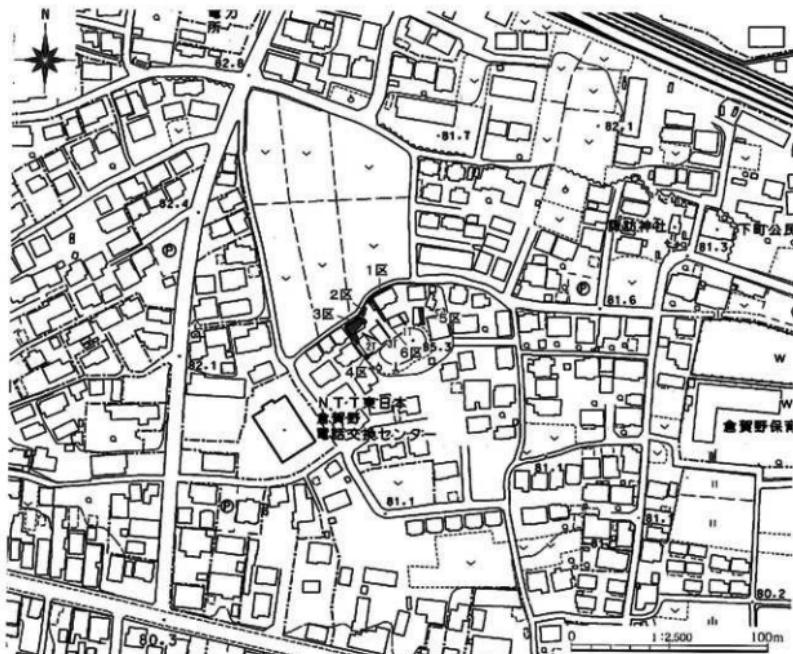
I 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月、事業者および施工責任者である大東建託株式会社より高崎市教育委員会（以下市教委）に集合住宅建築工事予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であり、当該地に古墳の存在する可能性が高いことから、試掘調査による確認を実施した上で、工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 8 月 28 日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 9 月 22 日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳に關する遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、埋蔵文化財を破壊しないで事業を実施することは不可能ということとなり、集合住宅の基礎工事が及んで埋蔵文化財が破壊される部分に関して、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成 25 年 11 月 21 日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結した。さらに協定に基づき平成 25 年 11 月 21 日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で委託契約が締結され、12 月 12 日より発掘調査が着手された。



第 1 図 調査区位置図

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

倉賀野長賀寺山古墳は群馬県の南部、高崎市倉賀野町橋東に所在する。この地域は市域の南東に位置し、榛名山南麓に広がる相馬ヶ原扇状地から続く前橋台地にあたる。前橋台地は、更新世後期における浅間山の火山活動に伴う山体崩落によって堆積した前橋泥流を基盤としている。前橋台地の中央付近を流れる井野川流域には井野川低地帯が広がり、この低地帯と烏川に挟まれた台地西城は「高崎台地」と呼ばれている。高崎台地には前橋泥流の上位に高崎泥流の堆積がみられる。台地の表面は榛名山麓から流れてくるいくつかの河川とその支流によって開拓され、微高地と低湿地が混在する起伏に富んだ地形が形成されている。

本古墳はこの高崎台地上に位置し、烏川左岸段丘上の北西から南東方向へ延びる微高地上に占地する。周辺の標高は81 m前後、古墳から烏川の現河床までの距離は南へ約450 mを計測する。

2 歴史的環境

本地域の遺跡は純文時代から確認されるが、ここでは古墳時代以降について概観する。

古墳時代の初期段階においては、集落は弥生時代後期に遺跡が密集する井野川中流域につくられる。その後、弥生時代の遺構が検出されていない井野川や烏川の下流域にも広がっていく。烏川下流域の左岸段丘上においては、倉賀野万福寺遺跡（16）、倉賀野宮ノ前遺跡（17）、下佐野遺跡（18）、舟橋遺跡（19）、上佐野舟橋遺跡（20）、下佐野長者屋敷遺跡（21）などで古墳時代前期の集落が確認されている。中でも下佐野Ⅱ遺跡は滑石製品の工房群が検出され、集落の広がりも大きいことから拠点的集落といえる。また、柴崎から矢中周辺では下中居条里遺跡（34）で集落が検出されている。柴崎熊野前遺跡（41）では自然流路から出土



第2図 遺跡の位置

した古墳時代前・中期の土器に混じって、水田耕作に使用されただろう木製農具が出土しており、周辺に集落が存在した蓋然性が高いと考えられる。生産遺跡としては、下中居条里遺跡で As-C 下の水田耕作を示す畦畔が検出されている。倉賀野続捕遺跡（28）ではプラント・オパール分析により、As-C 混入土層およびHr-FA 混入土層で稻作の可能性が指摘されている。

このような状況を背景として、本地域での古墳の築造は前方後方墳の元島名将軍塚古墳をもって開始される。本古墳から北北東へ約 3.3 km の位置にあり、井野川下流の左岸に占地する。4世紀前半の築造とされ、全長 95 m の規模を有する。4世紀後半前には、正始元年銘三角縁神獸鏡の出土で著名な柴崎蟹沢古墳が築造される。本古墳から北北東へ 1.9 km に位置する円墳で、この南方 600 m の同一台地上に展開する矢中村東遺跡（36）や村北 C 遺跡（38）では、前方後方形周溝墓・方形周溝墓が群在して検出されており、周辺地域が広範囲にわたり墓域として利用されていたことが明らかになっている。

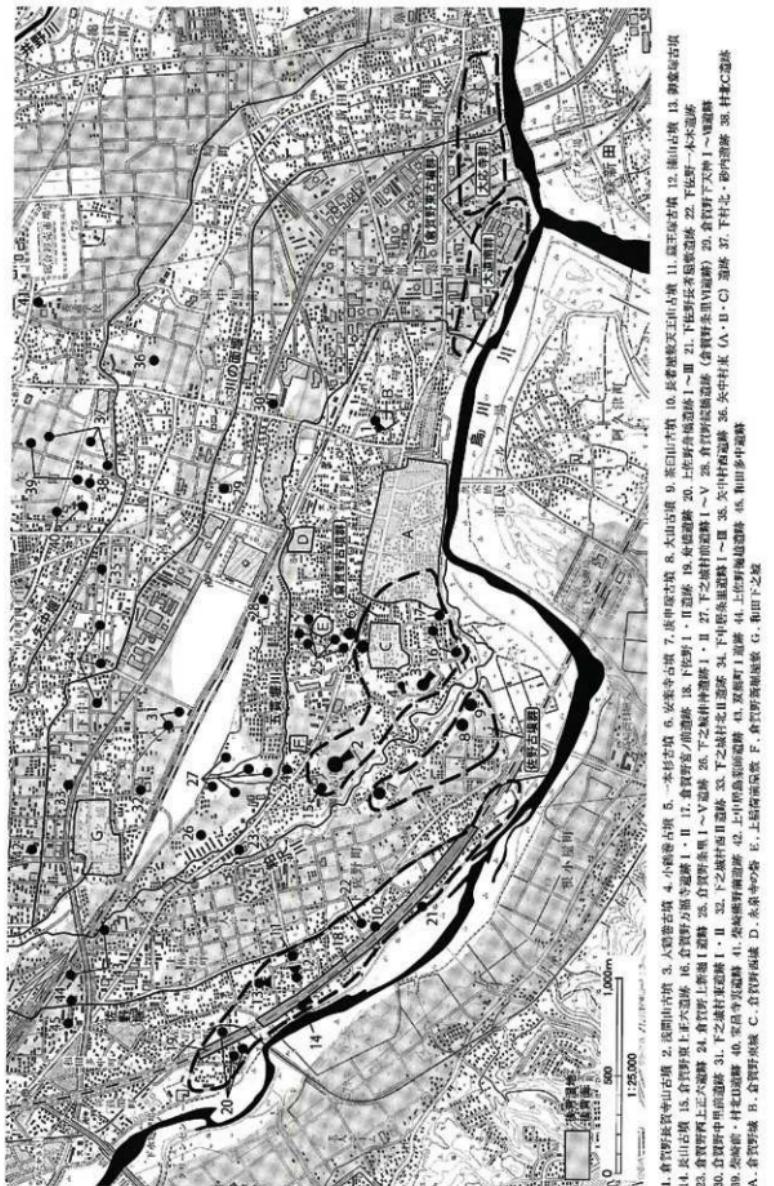
鳥川左岸には佐野古墳群が帶状に形成されている。大型円墳の長者星敷天王山古墳（10）に代表されるように、前期末から中期初頭に形成され、空白期間をおいて後後に再び形成される大規模古墳群である。柏沢川右岸の微高地上には、前期末ないし中期初頭とされる大型円墳の庚申塚古墳（7）、大山古墳（8）、茶臼山古墳（9）を中心とした古墳群が形成される。これらは行政区画から佐野古墳群として扱われているが、分布傾向や時期を考慮すると隣接する倉賀野古墳群に含めた方が適当であるという意見もある。

古墳時代中期の集落については、軒敷は少ないものの、前期の集落が營まれた下佐野遺跡、舟橋遺跡、上佐野舟橋遺跡、下中居条里遺跡などで引き継ぎ確認される。この頃、鳥川左岸段丘の微高地上に 5世紀初頭前後と推定される浅間山古墳（2）が築造される。全長 171.5 m の前方後円墳で、これに匹敵する規模と内容を備えた同時期の古墳は、西毛地域一帯では確認されない。この大型前方後円墳成立の背景には、西毛地域全体を統合するような地位を掌握した地域勢力の登場が窺える。倉賀野東上正六遺跡（15）は浅間山古墳の外堀調査で、中堤と外堀の一部が確認されている。同一微高地上には浅間山古墳と時期を前後して、全長 123 m の大鶴巻古墳（3）が築造される。また、時期を隔てた 5世紀後半には全長 87.5 m の小鶴巻古墳（4）が築造され、これら 3基の前方後円墳を中心とした倉賀野古墳群が後期初頭にかけて形成される。倉賀野古墳群に含まれる倉賀野万福寺遺跡では、5世紀後半以降を主体とする古墳が多数調査されている。

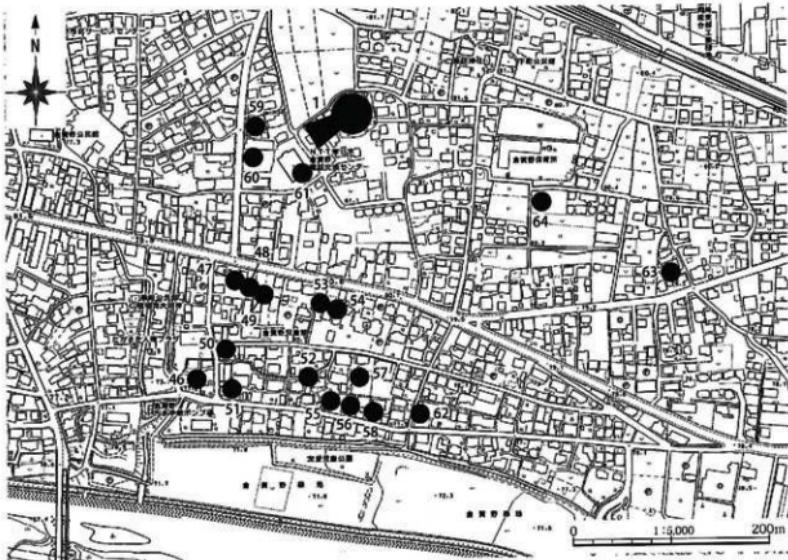
古墳時代後期になると、多くの新興集落が形成され、規模も拡大する。前代から継続する集落としては下佐野遺跡、舟橋遺跡、上佐野舟橋遺跡があり、新たな集落としては倉賀野西上正六遺跡（23）、下之城村前 IV 遺跡（27）、倉賀野中里前遺跡（30）、双葉町 I 遺跡（43）などがある。6世紀後葉から 7世紀後葉には、鳥川と鍋川の合流地点に倉賀野東古墳群大道南群が形成される。総数 160 基の円墳からなる大型群集墳である。その東側には同古墳群の大応寺群が展開する。前方後円墳 2基と大型円墳 3基を含み、5世紀後半から 6世紀前葉に遡る古墳が存在することから、大道南群とは異なった性格が予想される。さらに、倉賀野古墳群は 6世紀後半に盛隆し、佐野古墳群は 6世紀後半から 7世紀にかけて再形成される。佐野古墳群の代表的な古墳として、6世紀後半に属す大型円墳の藏王塚古墳（11）、前方後円墳の漆山古墳（12）などが挙げられる。同古墳群に含まれる下佐野遺跡や舟橋遺跡では小規模な古墳が多数確認されている。

古墳終末期には、倉賀野古墳群の北東に一本杉古墳（5）と安楽寺古墳（6）が築造される。一本杉古墳は径約 25 m と推定される円墳で、切石積構造の横穴式石室である。安楽寺古墳は埋蔵施設が群馬県では類例が認められない横口式石槨で、畿内政權との関わりの深い被葬者と理解されている。

奈良時代は、倉賀野中里前遺跡で 8世紀初頭の堅穴建物跡が 1軒調査されたのみで、調査事例が少なく判然としない。平安時代の集落は基本的には古墳時代と同様の立地を示すが、それまで遺跡分布が希薄であつ



第3図 周辺の道筋



第4図 周辺の古墳分布図

第1表 古墳一覧表

No.	古墳名	地形	埋葬施設	備考
1	長賀寺山	(前方後円)	円筒埴輪・形象埴輪、後円後平	
2	西園山	前方後円	(窓穴)	全長 171.5 m, 円筒埴輪・形象埴輪・刻形石製品、4c期～5c初期
3	大鶴谷	前方後円	(窓穴)	全長 123 m, 円筒埴輪・形象埴輪、4c末～5c初頭
4	小鶴谷	前方後円	—	全長 97.5 m, 地表剥離製陶式石棺、円筒埴輪、5c後
5	一本杉	円	積穴	(約25 m), 内袖型、勾玉・耳環・汽刃・冠刃・刀装具・盾・人骨、7c中盤以降
6	安楽寺	円	横口式石棺	直径約 20 m, 階状石基・載石頭前、7c末
7	庚申塚	円	(粘土層)	—下轮廓 8号墳、径 45 m前後、(3c-8c-刀・十輪鏡・前輪軸・中附物鏡)
8	大山	円	(粘土層)	—下轮廓 9号墳、径 50 m、(3c-石鏡記・前輪軸・中附物鏡)
9	蓬萊山	円	(粘土層)	—下轮廓 13号墳、径 57 m、(4c柱形石製品)、前輪軸・中附物鏡
10	長者福敷 天王山	円	(粘土層)	—下轮廓 17号墳、区1号墳、径 42 m、張り出し部分を小切削、小切削鏡、勾玉・管轡・ガラス小玉・水晶類等三・石製品等、二重口徑式、円筒埴輪・土師器等、前輪軸・中附物鏡
11	魔王塚	円	積穴	径 44 m、兩袖型、橫石置・板石置重積、円筒埴輪・石製品等、6c1/4～7c
12	瀬山	前方後円	積穴	(3c-4c-5c-6c), 両袖型、埴輪等、刀具・盾鏡・馬具・刀劍・人骨、6c1/4～7c
13	御堂塚	前方後円	(窓穴)	(2c-5c-6c前後)、(7c-筒鏡・刀劍・勾玉・管轡)、6c坐起室等
14	員山	前方後円	—	下轮廓 16号墳、4号古墳、円筒埴輪・剪輪・形象埴輪、上象形器・人刀・玉頭・人骨、5c中盤～後半
No. 古墳名 形態 埋葬施設 備考				
46	窓22号	円	—	名称: ダンロク山、(全長 7.8 m)
47	窓23号	円	—	
48	窓24号	円	—	
49	窓25号	円	—	
50	窓26号	円	—	
51	窓27号	円	—	
52	窓28号	円	—	
53	窓29号	円	—	
54	窓30号	円	—	
55	窓31号	円	—	
56	窓32号	円	—	
57	窓33号	円	—	
58	窓34号	円	—	
59	窓35号	円	—	名称: 庚申塚
60	窓36号	円	—	
61	窓37号	円	—	名称: 小手環山、(3c-筒鏡)
62	窓38号	円	—	名称: 庚申塚
63	窓42号	円	—	
64	窓45号	円	—	

「窓○号」は群上毛古墳群「食賀野町第○号墳
() は推定、() は文献等からの確認

た鳥川・井野川間の台地上にも集落が進出する。下佐野遺跡、舟橋遺跡、上佐野舟橋遺跡、下佐野一本木遺跡(22)、下之城仲沖遺跡(26)、倉賀野下天神遺跡(29)、柴崎前・村北B遺跡(39)、宝昌寺裏遺跡(40)などで調査されている。また、倉賀野、下之城、下中居、矢中、柴崎地区などの後背湿地においては、広範囲に施工されたAs-B下水田の存在が知られ、倉賀野上新堀I遺跡(24)、倉賀野条里遺跡(25)、下之城村前遺跡(27)、倉賀野続橋遺跡、倉賀野下天神遺跡、下之城村東遺跡(31)、下之城村西II遺跡(32)、下之城村北II遺跡(33)、下中居条里遺跡、矢中村西遺跡(35)、下村北・砂内遺跡(37)など多数の調査事例がある。

中世になると、多くの城館・環濠施設が築かれた。大規模な城館として倉賀野城(△)と和田下之城(△)が挙げられる。倉賀野城は、応永年間(1394～1427年)に武藏七党の一つ、児玉党の倉賀野氏が築いたと伝えられる。鳥川の崖線に面して立地し、水運の拠点として重要な城であったが、天正18(1590)年、豊臣勢の進攻により落城し、廃城となった。周囲には倉賀野東城(△)、倉賀野西城(△)、永泉寺の森(△)、上船荷前屋敷(△)などの外堡が一定距離で配置されている。

近世には、中山道と日光例幣使道の分岐点に倉賀野宿が形成された。鳥川の現共栄橋付近には倉賀野河岸が形成され、陸上交通および利根川水運の拠点として非常に繁栄した。なお、町内には中世から続く寺院も数多く存在しており、本占領の南側に建立されていたと伝えられる密光山長賀寺もそのひとつである。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

本遺跡の開発対象面積は824.48 m²であるが、調査範囲は遺跡を破壊する道路付け替え部分と擁壁撤去部分の124.3 m²のみとなった。設計図面を基にして6カ所のトレント状調査区を設定した(1～6区)。なお、調査の最終段階で高崎市教育委員会が6区を北へ延長して調査を行っている。

表土掘削は0.2 m²バックホーを用い、その後の遺構確認・掘削は人力で行った。遺構掘削の際は土層剥離用ベルトを適宜設定し、埋没状態や構築状態を観察した。調査の進捗ごとに同時に写真撮影および平面図・断面図の測量を行った。遺構平面図はトータルステーションを用い、断面図は手実測で作成した。写真撮影には35mm判のフィルムカメラ(Nikon FM2:モノクロ・リバーサル)と1,200万画素相当のコンパクトデジタルカメラ(Canon IXY 120)を使用した。調査の最終段階においては、ラジコンヘリコプターによる空撮を実施している。遺構調査終了後には、擁壁の撤去および埋め戻しを行った。

出土遺物は洗浄・社記ののち、接合および実測個体の抽出を行った。遺物の写真撮影には1,000万画素相当のデジタル一眼レフカメラ(Nikon D7000)を使用した。遺構トレースおよび写真加工はAdobe Photoshop 6、Adobe illustrator CS2を用いた。遺物実測・トレースは手作業で行った。報告書はAdobe InDesign CS2を用いて編集した。

2 調査の経過

発掘調査は平成 26 年 12 月 12 日～平成 27 年 2 月 2 日、整理作業は平成 27 年 4 月 2 日～同年 6 月 30 日まで行った。

(1) 発掘調査の経過

平成 26 年 12 月 12 日、調査区の設定。擁壁上のフェンスを撤去。重機搬入。15 日、重機による表土掘削を開始。安全対策を講じる。17 日、作業員を導入する。1・2 区の道構確認作業を行い、中近世の道構(構・畦畔)を確認した。18・19 日、1 区の古墳周囲の掘り下げを行う。22 日、表土掘削を終了し、重機を搬出する。3 区中近世の道構(構・畠)の検出作業を行う。24・25 日、1・2 区周囲の掘り下げを行う。26 日、5・6 区墳丘面を検出した後、5 区の墳丘断ち割りに着手する。



3 区周堀 挖削状況



5 区墳丘 断ち割り状況



5 区南側の墳丘断面

平成 27 年 1 月 5 日から現場作業を開始。1 区周囲の掘り下げ、5 区墳丘の断ち割りを継続する。6～8 日、2 区周囲の掘り下げを行う。9 日、5 区墳丘の断ち割りを中断し、6 区墳丘の断ち割りに着手する。13 日、1 区周囲の掘り下げ、6 区墳丘の断ち割りを継続する。14 日、1 区の南壁が崩落し、地表面に亀裂が入る。亀裂が 1 区南側にある残土山の下まで入り込んだため、午前中は人力で残土山の移動と崩落土の撤去を行う。15 日、1 区周囲の掘り下げおよび 6 区墳丘の断ち割りを終了する。降雨のため午前中で現場作業を終了する。16 日、昨日の降雨により 1 区南側に亀裂の入った部分が大きく崩落、午前中は復旧作業に従事する。18・19 日、3 区周囲の掘り下げを行う。20 日、全体清掃後、空撮を行う。21 日、5 区墳丘の断ち割りを再開する。22 日、雨天のため現場作業を中止する。23 日、3 区周囲の掘り下げを終了する。24 日、重機を搬入して 1・2 区の埋戻しを行う。26 日、5 区墳丘の断ち割りを終了する。高崎市教育委員会が 6 区北側の調査を開始する(～29 日)。27・28 日、測量を行う。29 日、3・4 区の埋戻しを行う。30 日、降雪のため現場作業を中止する。31 日、3 区擁壁の撤去および、6 区の埋戻しを行う。2 月 2 日、クラッシャーを搬入し、1 区擁壁基礎の撤去を行う。5 区の埋戻しおよび残土整地を行う。重機・クラッシャーの搬出。仮設トイレの汲み取り。発掘器材を撤収し、現地での調査を終了する。

(2) 整理作業の経過

平成 27 年 4 月 2 日：出土遺物の水洗い・注記作業(～7 日)。4 月 6 日：道構図の修正・トレースを行う(～24 日)。4 月 8 日：遺物の接合作業を開始する(～9 日)。4 月 13 日：遺物写真撮影、加工を行う(～17 日)。4 月 15 日：遺物実測作業開始(～27 日)。4 月 22 日：遺物の拓本、遺物図のトレースを行う(～5 月 14 日)。4 月 27 日：原稿執筆および編集作業を開始する(～6 月 5 日)。6 月 12 日：原稿を入稿し、以降、校正作業を行う。6 月 30 日：印刷製本が完了。

IV 検出された遺構と遺物

1 概要

倉賀野長賀寺山古墳は、昭和 13 年発行の『上毛古墳総覧』に記載される倉賀野町第 38 号墳で、径 117 尺（約 35.5 m）、高さ 20 尺（約 6.1 m）の円墳と登録されている。名称の由来は「明治初年マデ長賀寺ト稱スル庵室アリ、依ツテ長賀寺山ト稱ス」とある。また、昭和 47 年発行の『群馬県遺跡台帳 II（西毛編）』には「径 35 m の円墳で周濠、葺石、埴輪等あり横穴式内部主体といわれる」と記載されている。その後、梅澤重昭氏により前方部が西面する前方後円墳の可能性が示唆され（梅澤 1992）、現行政側は前方後円墳との見解を示している。また、吉澤学氏は昭和 22 年撮影の米軍空撮写真の図化資料を基礎として、全長約 72 m の帆立貝式古墳と復元している（吉澤 2005）。

本古墳の現況は、周囲の宅地化により大部分が地取りされ、墳丘の一部のみが残存している状況である。残存規模は東西 40 m × 南北 30 m ほどで、現道からの高さは約 5 m である。残存する墳丘部分も北側は大きく削り取られ、以前は住宅が建ち並んでいた。墳丘の北側には幅の狭い現道が通り、あたかも墳丘面に沿うかのように湾曲している。本古墳は現代の開発により大規模に破壊されてしまったが、すでに中世には「長賀寺」の建立や、墳丘を利用した「倉賀野東城」の造営が知られ、古くから改変をされていたと考えられる。

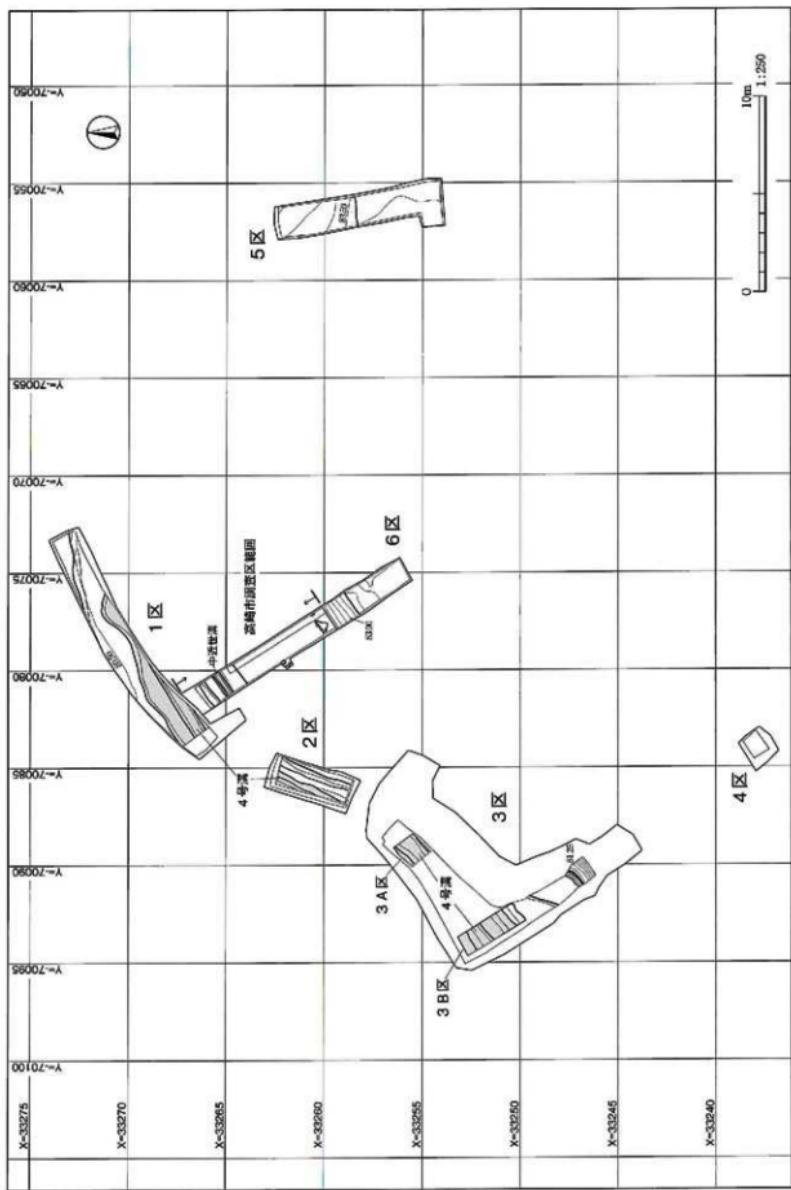
今回の調査区は古墳の北側にあたり、後円部からくびれ部にかかる部分と想定される。開発箇所に合わせて 6 カ所のトレチ状調査区（1～6 区）を設定した。1・2 区は後円部、3 区は後円部からくびれ部にかかる部分で、周堀の存在が確認された。ただし、周堀埋没後に中世の溝（4 号溝）が掘り込まれたため、一部旧状を留めるに過ぎない。

4 区は後円部からくびれ部にかけての墳丘部分にあたる。現代の造成土が厚く堆積し、現地表面から 2 m 以上掘削しても墳丘盛土に達しなかった。調査区が 2.0 m × 1.5 m と狭小で、これ以上掘り下げるに崩落の危険があるため、高崎市教育委員会と協議して調査を中止した。

5 区は後円部の墳丘部分、6 区は墳丘から墳端部分にあたる。墳丘構造および築造時の地表面を明らかにするために、盛土の断ち割り調査を行った。その結果、5 区は現地表面から約 2.6 m 下、6 区は約 2.4 m 下で黒色土を量する旧表土が検出され、この上に盛土をして墳丘を構築していたことが判明した。盛土は基本的に黒色土と黄色土の互層で構築され、いくつかの作業単位が観察できた。なお、6 区北側では石列や埴輪、周堀の立ち上がり付近が確認された。

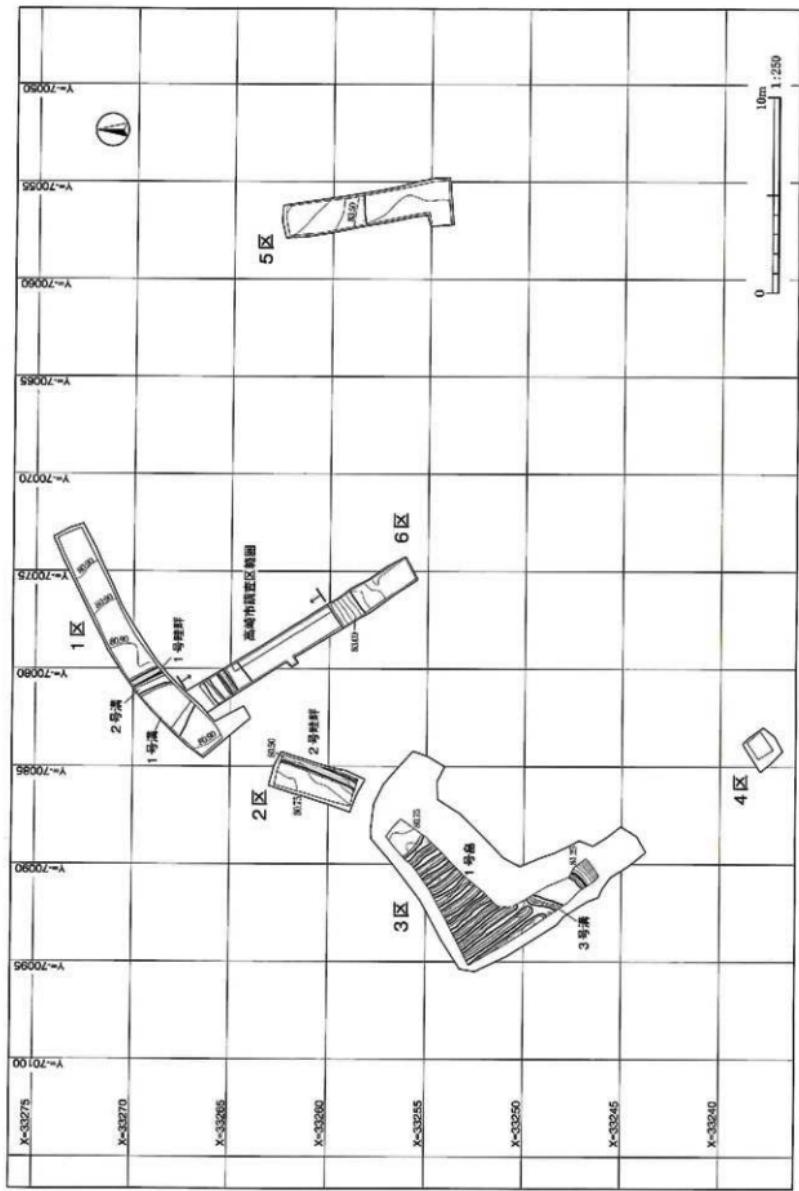
古墳に伴う遺物として、埴輪と須恵器がある。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪だが、大半が破片のため全体を復元できる資料はない。円筒埴輪の外面調整は一次タテハケのみである。形象埴輪は器財埴輪（盾形・鰐形等）が確認された。須恵器は廻胴部の破片である。旧表土中からは、古墳時代前期に比定される上師器壺・壺の破片や黒曜石剥片が出土しており、周辺に遺構の存在する可能性が高いと思われる。

古墳築造後は、上述のように周堀内に溝が掘り込まれ、覆土中からは常滑窯の破片や板碑が出土している。さらに、溝埋没後にはその上層に水路と想定される溝 3 条、水田畦畔 2 条、扇 1 カ所が検出され、耕地として使用されていたようである。また、1 区では現地表面から約 55 cm 下で多量の安山岩を含む層が認められた。近世陶磁器の混入がみられ、近世にも土地造成が行われた可能性がある。なお、古墳名の由来となった長賀寺は墳丘南側に建立されていたと伝えられ、永和 4（1378）年の開基といわれる。延亨 3（1746）年以降、本古墳の北西約 300 m にある養報寺の末寺となり、明治年間に廃寺となつた。遺跡内からは「明和 6（1769）年」の没年が刻まれた墓石や五輪塔の空風輪など、長賀寺を偲ばせる遺物の出土もみられている。



第5圖 全體圖1(古墳)

第6圖 全體圖2(古須以降)



2 古墳

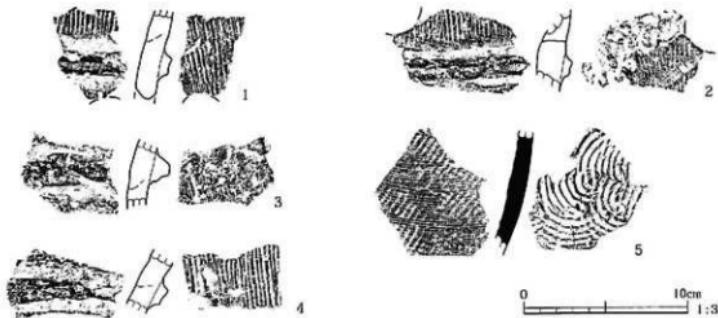
(1) 1区(第7・8図)

調査区の位置：後円部の北側にあたる。北東—南西方向に長いトレンチ状の調査区で、現道に合わせてやや屈曲する。

重複関係：南壁際を4号溝に切られる。

周堀：北壁へ向かってなだらかに立ち上がる傾斜面が検出された。傾斜面のコンタは緩やかな曲線を描き、これは埴丘面に沿っているものと推測される。周堀は地山の高崎泥流層を掘り込んで形成している。調査区内での最深部の標高は80.34mである。堆積土は褐灰色を呈す砂泥じりの粘質土を基調とする。全体的に鉄斑が沈着し、少量だが小石の混入がみられる。土層断面A・B-8層には炭化物粒が含まれている。なお、堆積土中に明確なAs-Bを確認することはできなかった。

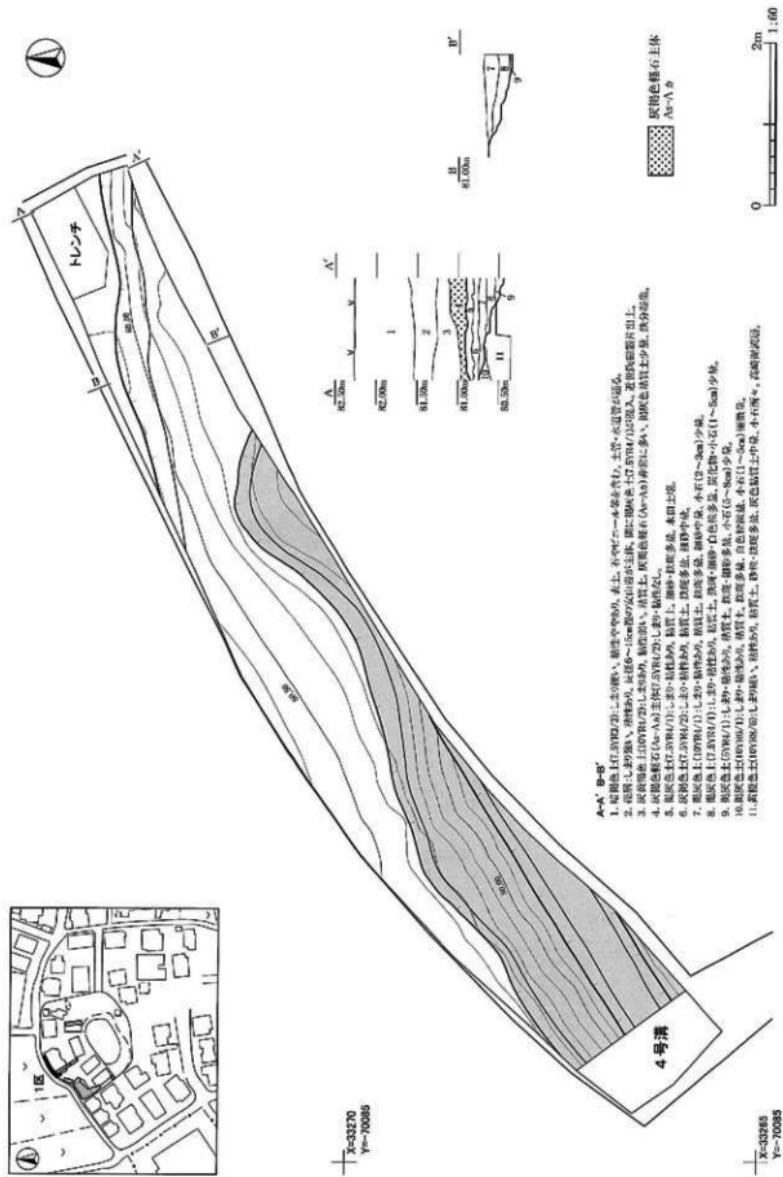
遺物出土状態：上層断面A・B-7～9層から円筒埴輪片32点、土師器片12点（壺・壺）、須恵器片9点（高台付碗・甕）が出土した。いずれも小破片である。埴輪は円筒埴輪で、4は朝顔形円筒埴輪の可能性がある。土師器は古墳時代前期～中期に帰属するものと思われる。須恵器は圓化したものの古墳時代、それ以外は古代に帰属する。



第7図 1区出土遺物

第2表 1区出土遺物観察表

遺物名	遺物類	器種	法数	成・整形技法の特徴		備考
				①焼成	②色斑	
1区 1	円筒埴輪	口径	-	①やや吸水質	②外一層、内一層	外側：表面M字形。透孔あり。内側丸。タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③山高内丸・角因石・白色院		内面：ナナメハケ。ハケ目8本 / 2cm。
		脚高	-	④側面吸水質		
		口径	-	①やや吸水質	②外一層、内一層	外側：表面M字形。透孔あり。内側丸。タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③山高品内丸・角因石・白色院		内面：タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。
		脚高	-	④側面吸水質		
1区 2	円筒埴輪	口径	-	①良好	②外一層吸水質、内一層	外側：表面M字形。透孔あり。内側丸。タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③山高品内丸・角因石・白色院		内面：タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。
		脚高	-	④側面吸水質		
1区 3	円筒埴輪	口径	-	①良好	②外一層吸水質、内一層	外側：表面M字形。タテハケ。ハケ目本数不明。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③山高品内丸・角因石・白色院		内面：タテハケ。ハケ日本標準目により不明。
		脚高	-	④側面吸水質		
1区 4	円筒埴輪	口径	-	①良好	②外一層吸水質、内一層	外側：表面M字形。タテハケ。ハケ目本数不明。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③山高品内丸・角因石・白色院		内面：タテハケ。ハケ目8本 / 2cm。
		脚高	-	④側面吸水質		側面削除輪輪跡。
1区 5	須恵器	口径	-	①透光質	②外一層、内一層	外側：平行タタキ板、カキメ。1区周堀頂土中。
		底盤	-	③褐色粒		内面：同心円の当て洗版。
		脚高	-	④側面吸水質		



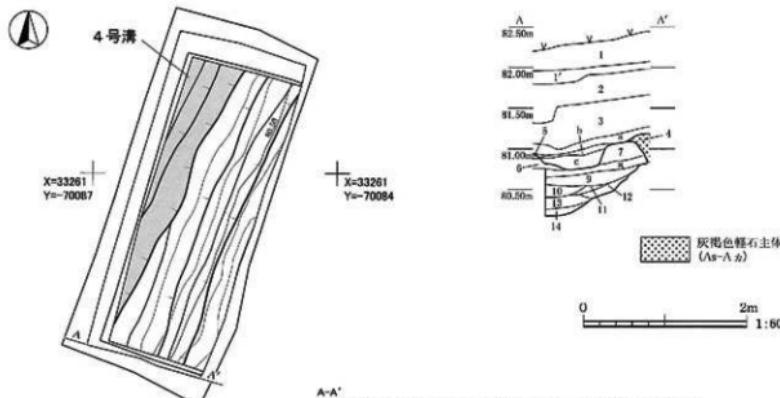
第8回

(2) 2区(第9・10図)

調査区の位置：後内部の北側にあたる。北東—南西方向へ長いトレンチ状の調査区で、現道と並行する。
重複関係：西壁際を4号溝に切られる。

周堀：東壁へ向かってやや急角度で立ち上がる傾斜面が検出された。傾斜面のコンタはごく緩やかな曲線を描き、これは墳丘面に沿っているものと推測される。周堀は地山の高崎泥流層を掘り込んで形成している。調査区内での最深部の標高は80.20mである。堆積土は褐灰色を呈す砂混じりの粘質土を基調とし、全体的に鉄斑が沈着する。なお、堆積土中に明確なAs-Bを確認することはできなかった。

遺物出土状態：上層断面A-9～14層から埴輪片13点、土師器片2点（甕・壺）が出土した。いずれも小破片である。埴輪は円筒埴輪である。土師器は古墳時代前期に帰属するものと思われる。



- A-A'
1. 褐灰色土 (7.5YR2/3) : L-20cm弱い。軟化ややかめ。表土。石非常に多く。水道管が通る。
 2. 褐灰色土 (7.5YR2/3) : L-20cm弱い。軟化ややかめ。小石多量。1層の基盤。
 3. 粘質土 (10YR2/3) : L-20cm弱い。軟化ややかめ。As-A多量。鉄斑少量。石 (5~10cm) 所々。
 4. 灰褐色輕石 (As-Aa) : 厚さ10cm (10YR4/2) : 黒い。鉄斑など多く。
 5. 褐色土 (5YR1/1) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑少量。色暗め。
 6. 粘質土 (10YR4/2) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑少量。鐵斑や色々な色暗め。
 7. 灰褐色土 (5YR4/2) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑多量。鐵斑や色々な色暗め。
 8. 粘質土 (10YR4/2) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑多量。鐵斑や色々な色暗め。
 9. 粘質土 (10YR4/1) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑多量。鐵斑少量。
 10. 粘質土 (7.5YR1/1) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑多量。鐵斑や色々な色暗め。
 11. 粘質土 (7.5YR3/3) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑少量。鉄斑少量。石 (2~3cm) 所々。
 12. 粘質土 (10YR3/2) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑少量。鉄斑少量。石 (2~3cm) 所々。
 13. 粘質土 (N3) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑多量。鉄斑少量。石 (5~8cm) 所々。
 14. 粘質土 (10YR4/1) : L-20cm弱い。粘質土。鉄斑少量。鉄斑少量。
 - a. 馬頭形土 (10YR4/1) : L-20cm弱い。粘質土。灰褐色輕石 (As-Aa) 少量。構造土。
 - b. 灰褐色輕石 (As-Aa) : 厚さ7.5cm (10YR4/2) : 黒い。軟化ややかめ。灰褐色粘土少量。鉄斑少量。構造土。
 - c. 灰色土 (N3) : L-20cm弱い。粘質土。灰褐色輕石 (As-Aa) 少量。鉄斑多量。小石 (0.5~1cm) 数量。構造土。

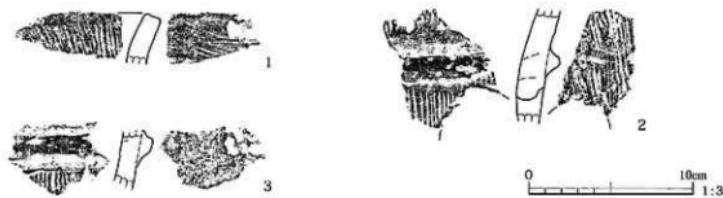
第9図 2区

(3) 3区(第11・12図)

調査区の位置：後内部からくびれ部の北側にあたると推測される。調査区はL字形を呈する。北東—南西方向に現道と並行し、南西端で南東方向へ直角に曲がる。周堀の調査は、この中に2ヶ所のトレンチを設定して行った。東側を3A区、西側を3B区とした。

重複関係：調査区中央を4号溝に切られる。

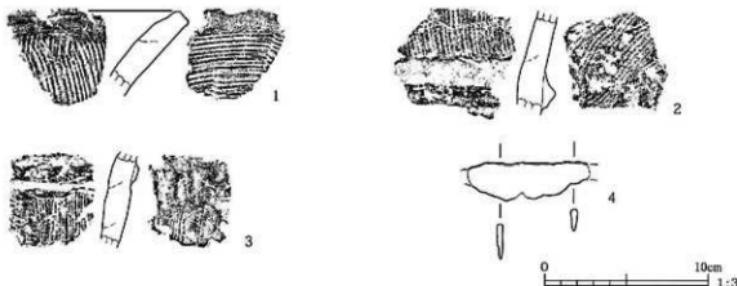
周堀部分：南東へ向かってなだらかに立ち上がる傾斜面が検出された。傾斜面のコンタは直線的である。周堀は地山の高崎泥流層を掘り込んで成形している。調査区内での最深部の標高は3B区で80.50mである。



第10図 2区出土遺物

第3表 2区出土遺物観察表

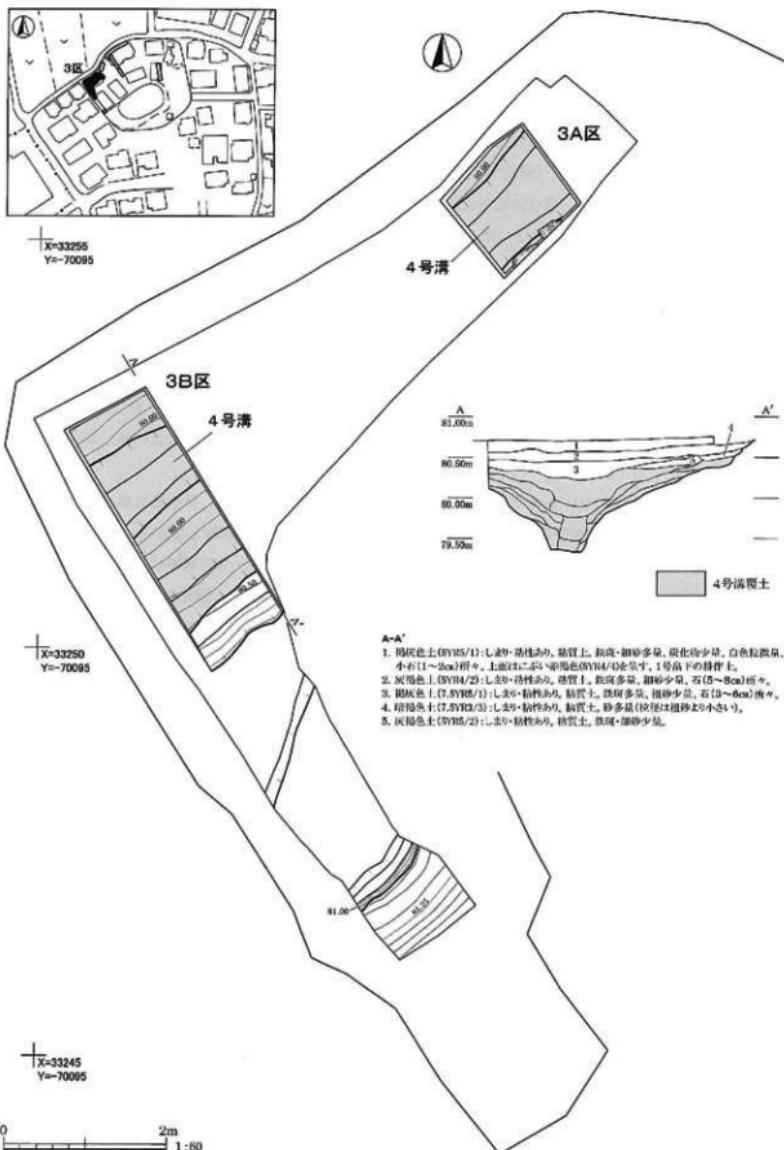
遺物名	遺物No.	器種	法位	①焼成 ②色調 ③断土 ④保存	成・整列技術の特徴	参考
2区	1	円筒埴輪	口径	①良好 ②外一層、内一層 底径 ③柱状晶片岩、白色粒状、白色粒、 窓沿 ④口部破片	外面：タテハケ後、口部部ヨコナガ。ハケ目7本 / 2cm。 内面：ナメハケ後、口部部ヨコナガ。ハケ目8本 / 2cm。	2区周堀覆土中。
2区	2	円筒埴輪	口径	①良好 ②外一層、内一層 底径 ③柱状晶片岩、白色粒、黑色粒 窓沿 ④柱状晶片岩	外面：突端右折、透孔あり、凹凸々。タテハケ。ハケ目6本 / 2cm。 内面：タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。	2区周堀覆土中。
2区	3	円筒埴輪	口径	①良好 ②外一層赤鉄、内一層赤鉄 底径 ③柱状晶片岩、白色粒、黑色粒、角閃石 窓沿 ④柱状晶片岩	外面：突端右折、タテハケ。ハケ目7本 / 2cm。 内面：壁厚のため不明。	2区周堀覆土中。



第11図 3区出土遺物

第4表 3区出土遺物観察表

遺物名	遺物No.	器種	法位	①焼成 ②色調 ③断土 ④保存	成・整列技術の特徴	参考		
3区	1	円筒埴輪	口径	①やや軟質 ②外一層、内一層 底径 ③柱状晶片岩、白色粒、黑色粒 窓沿 ④口部破片	外面：タテハケ後、口部部ヨコナガ。ハケ目7本 / 2cm。 内面：ヨコハケ後、口部部ヨコナガ。ハケ目7本 / 2cm。 側面切口直角輪。	3区周堀覆土中。		
3区	2	円筒埴輪	口径	①やや軟質 ②外一層、内一層 底径 ③柱状晶片岩、白色粒、黑色粒 窓沿 ④柱状晶片岩	外面：突端右折、タテハケ。ハケ目6本 / 2cm。 内面：ナメハケ後。ハケ目7本 / 2cm。	3区周堀覆土中。		
3区	3	円筒埴輪	口径	①良好 ②外一層赤鉄、内一層赤鉄 底径 ③柱状晶片岩、白色粒、黑色粒、赤鉄 窓沿 ④柱状晶片岩	外面：突端低い右折。タテハケ。ハケ目9本 / 2cm。 内面：タテハケ。ハケ目8本 / 2cm。	3区周堀覆土中。		
遺物名	遺物No.	器種	法位 (cm・g) / 特徴					
3区	4	瓦器 刀子	長さ : [7.5], 幅 : 2.3, 厚さ : 0.4, 重さ : [14.9]。両端部欠損。					



第12図 3区

堆積土は褐色を呈す砂混じりの粘質土を基調とし、全体的に鉄斑が沈着する。なお、堆積土中に明確なAs-Bを確認することはできなかった。

遺物出土状態：土層断面A-1～5層から埴輪片17点、土師器片12点（壺・壺）、須恵器片2点（高台碗・壺）、刀子1点が出土した。いずれも小破片である。埴輪は円筒埴輪で、1は朝顔形円筒埴輪の可能性がある。土師器および須恵器は古墳時代から古代に帰属するものと思われる。

備考：南東端では南東から北西へ傾斜する盛土が確認された。As-Aと推測される軽石主体層の下（第21図：土層断面C）から検出された。埴丘斜面が残存しているものと思われたが、この盛土は暗褐色土を基調とするもので、5・6区にみる埴丘盛土とは異なる土であった。そのため後世の改変に伴う盛土と判断した。

（4）5区（第13図）

調査区の位置：後円部の埴丘北東側にあたる。調査区は南北方向に長いトレンチ状を呈する。

埴丘：表土を掘削したところ、現地表面から15～20cmほどで黄褐色土を基調とした盛土が検出された。検出面では南から北へ向かって緩やかに傾斜しており、標高は南側で83.60m、北側で83.20mである。埴丘の断ち割りは南壁面で行った。土層断面は埴丘主軸に近い南壁で観察し、西側は埴丘内側、東側は埴丘外側となる。

旧表土：標高81.29m～81.19mで検出された。東側に比べ西側がやや低い。旧地表は黒色土で、厚さは20cmほどである。この下に黒褐色土層が18cmほど堆積し、その下が高崎泥流層となる。

盛土：盛土は旧表土から高さ約2.4m遺存していた。色調や混入土の差から7種類に大別できる。①黒色土層、②黒色土主体で黄褐色土・褐色土を含む層、③褐色土主体で黄褐色土・褐色土を含む層、④暗褐色土主体で黄褐色土・黒色土を含む層、⑤褐色土主体で黄褐色土・褐色土・黒色土を含む層、⑥明黄褐色土主体で褐色土・褐色土を含む層、⑦黄褐色土主体で褐色土・褐色土を含む層である。締まりは全て硬い。黒色土系は旧表土、黄色土系は地山の高崎泥流層に由来する。①は黒色土のみで混入物はほとんどみられない。②～⑦は混入土の量に多少があり、現場調査時には細分していたが、ここではまとめて扱った。

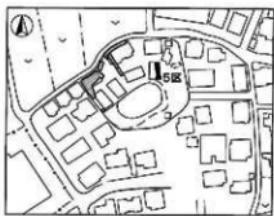
盛土の1単位の層厚は3～25cmと様々である。相対的に①～⑥の黒色土系の層が薄く、④～⑦の黄色土系の層が厚い。土層断面から、埴丘内側から外側へ傾斜する盛土を形成し、その外側にほぼ水平積みの盛土を寄せていることが観察された。

遺物出土状態：盛土中から土師器片2点（壺・壺）が出土した。小破片のため図示していないが、古墳時代に帰属すると考えられる。

（5）6区（第14～17図）

調査区の位置：後円部の埴丘北側にあたる。調査区は南北～北西方向に長いトレンチ状を呈する。当初の調査区は南北4.5mの長さであったが、埴丘および周囲立ち上がりの見得を得るために、高崎市教育委員会が北西へ7.8m延長して調査を行った。

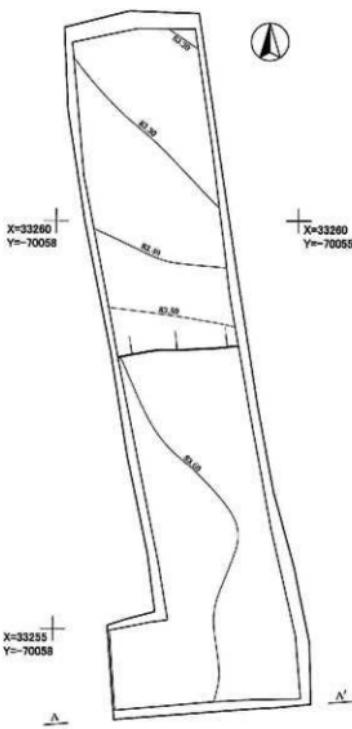
埴丘：盛土は調査区南端から約8.4mの長さで残存する。埴丘部分を削平しているのは表土のみである。その断面形態はおおよそ古墳本体の形状を現していると考えられ、付け基壇もしくはテラスをめぐらせていく可能性が高い。埴丘端部とテラスとの境は、石列の確認された箇所と、盛土単位が一度切れ、その外側に付け足された土層断面A-26付近の2ヵ所に求められる。埴丘の断ち割りは東壁面で行った。土層断面は



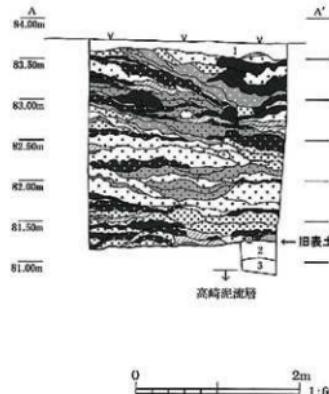
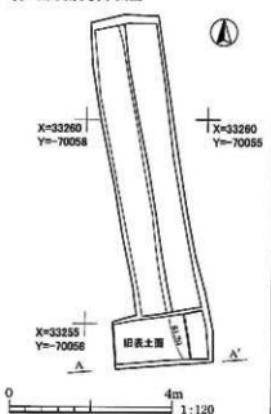
填丘盛土



1. 灰褐色土(1.0VYR2/2)：しまり・粘性ややあり。A-A'・小石多量。表土。
2. 黑色土(1.0V2/1)：しまり・粘性ややあり。旧表土。
3. 褐色土(7.5YR2/2)：しまり・粘性ややあり。



填丘断ち割り後平面図



第13図 5区

墳丘主軸と概ね直交する東壁で観察し、南側は墳丘内側、北側は墳丘外側となる。

旧表土：標高 81.40 m で検出され、ほぼ水平である。旧地表は黒色土で、厚さは 25 ~ 35 cm ほどである。この下に褐色土層が 10 ~ 20 cm ほど堆積し、その下が高崎泥流層となる。南壁際では、これを掘り込む落ち込みが確認され（土層断面 A-30-31 層）、遺構覆土の可能性がある。

盛土：盛土は旧表土から最高で約1.9m遺存している。色調や混入土の差から6種類に大別できる。**①**黒色土層、**②**黒色土主体で黄橙色土・褐色土を含む層、**③**褐灰色土主体で黄橙色土を微量～少量含む層、**④**褐灰色土主体で黄橙色土を中量～多量含む層、**⑤**明黄褐色土主体で褐灰色土・褐色土を含む層、**⑥**黄橙色土主体で褐灰色土・褐色土を含む層である。締まりは全て強いが、5区ほどの硬さはない。黒色土系は旧地表に、黄色土系は高崎泥流層に由来する。**①**は黒色土のみで混入物はほとんどみられない。**②**～**⑥**は混入土の量に多少があり、現場調査時には細分していたが、ここではまとめて扱った。

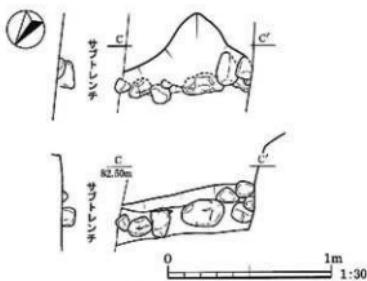
盛土の1単位の層厚は3~22cmと様々である。相対的に①~④の黒色土系の層が薄く、⑤・⑥の黄色土系の層が厚い。土層断面観察から、墳丘内側から外側へ向かって盛土をしたことが判明した。

石列：南壁際から約 5.3 m 先で盛土内に埋没する石列が検出された。長側面を填丘外側に向かって、北東—南西方向に並んだ状態であった。石は安山岩で、大きさは長さ 12 ~ 25 cm、幅 9 ~ 12 cm、厚さ 9 ~ 16 cm と様々である。石底面の標高は 82.14 m ~ 82.06 m である。

埴輪：南壁際から約6.5m先の西壁際に半面のみ露出した。拡張したところ、円筒埴輪の基底部が周囲側へ傾いた状態で検出された。透孔は東西方向を向いていた。基底部下面の標高は81.88mである。埴輪が検出された位置はテラス部分と想定され、原位置を保っていると考えられる。土層断面Dをみると、埴輪2は3層を掘り込んで埋設されている。しかし、埴輪の南側には掘り込み面が確認できず、掘り込みが流出したためか不明瞭となっている。

周堀：北壁側で周堀の落ち際が検出された。傾斜はやや急角度で、旧表土および高崎泥流層を埋り込んでいた。

第5表 6区出土遺物觀察表

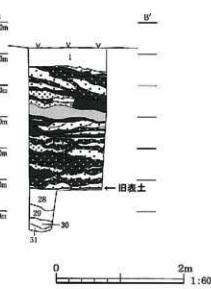
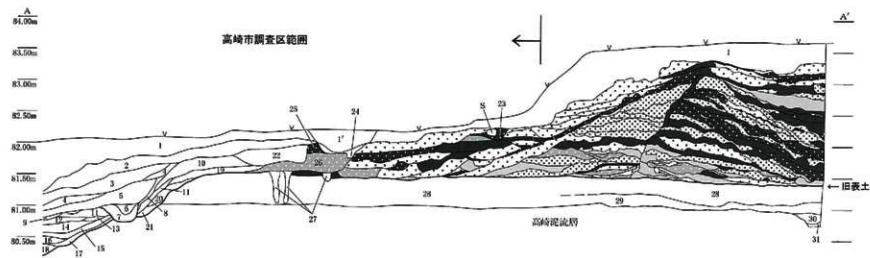
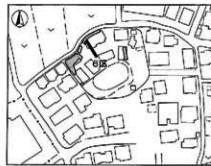
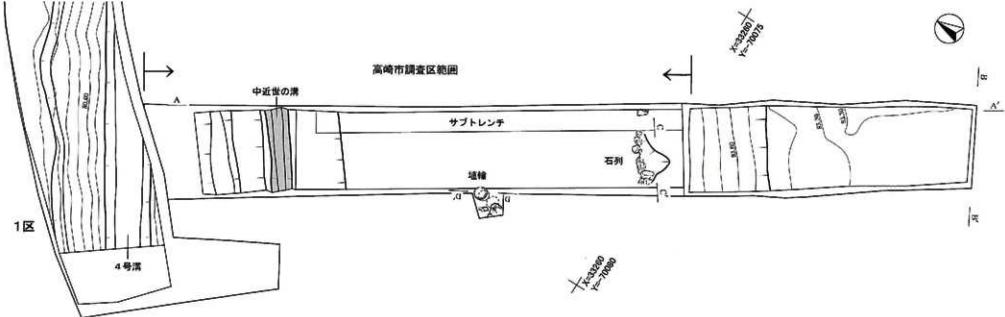


第14图 6区石列



第15圖 6區植榆

造物名	造物名	部種	法華	成・整形技術の特徴				備考
				①施或	②色黄	③耐土	④残存	
6区	1 内輪輪幅	口径	44.8	①施或	②色黄	③耐土	④残存	頂面：口部は9.1cm、 外輪：鋸歯状輪幅。内輪輪幅 （内輪）口部幅1/3
6区	2 内輪輪幅	口径	12.6	①施或	②色黄	③耐土	④残存	頂面：口部は13.0cm、 内輪輪幅：鋸歯状輪幅 （内輪）口部幅1/3
6区	3 土蜘蛛	口径	8.4	①令和良好	②色彩	③耐土	④残存	外輪：突起部有輪幅、 内輪：台輪ナゲ、底面所見基盤
		脚輪	3.4	①施或	②色白	③耐土	④残存	台輪ナゲ、底面所見基盤



堵丘營士

黒色土：しまり強い、粘性ややあり。

黑色土主作：蕷螺角主，褐色土多含松

第四章 土地估價 · 第四節 土地指標 · 土地指標

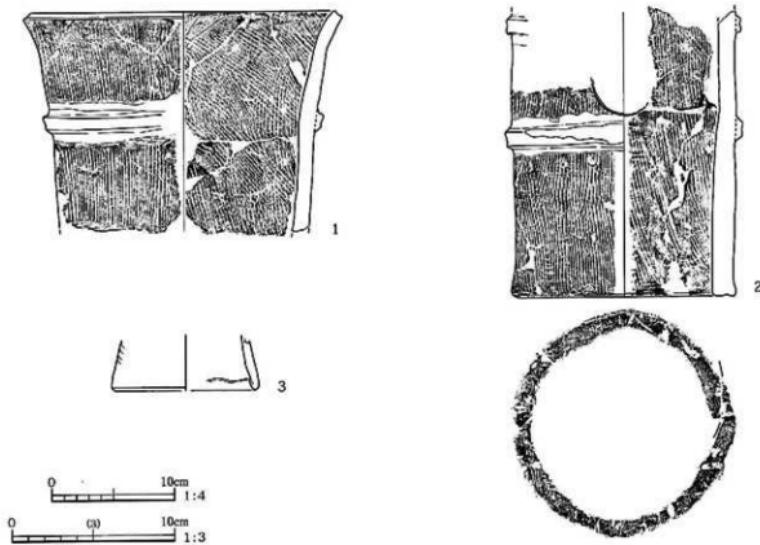
しまり強い。格性マーキ。

しまり強い。粘性ややあり。

アッシュセラミック：陶灰セラ・陶色
しまり強い。粘性ややあり。

17.に近い黄色虫 (10W97/2) : 小型の頭、複眼や触角、足は、黄色脚十枚や少頭。
18.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、黄色の頭部の黒斑、黄色の頭や足部。
19.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、白色脚 (♂ 0.5mm) 中少頭。
20.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚 (♂ 0.5mm) 中少頭。
21.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や多頭。
22.黒頭虫 (10W97/1) : 小型の頭、黑色十枚や多頭、足は、黑色脚十枚や少頭。
23.灰頭虫 (10W97/2) : 小型の頭、触角や触手、足は、灰色脚十枚や少頭。
24.灰頭虫 (10W97/2) : 小型の頭、触角や触手、足は、灰色脚十枚や少頭。
25.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。
26.頭部色 (10W97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。
27.灰頭虫 (10W97/2) : 小型の頭、触角や触手、足は、灰色脚十枚や少頭。
28.頭部色 (10W97/2) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。
29.頭部色 (J.W.97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。
30.頭部色 (J.W.97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。
31.頭部色 (J.W.97/1) : 小型の頭、触角や触手、足は、黑色脚十枚や少頭。

第16回 6区



第17図 6区出土遺物

形成している。後世の削平により立ち上がりの明確な位置は不明であるが、土層断面観察から調査区南壁際から約10.5mの付近に求められると考えられる。堆積土は褐灰色を呈す砂混じりの粘質土を基調とする。埋没後数段階にわたって掘削され、これによって生じた小溝や段差が確認できた。

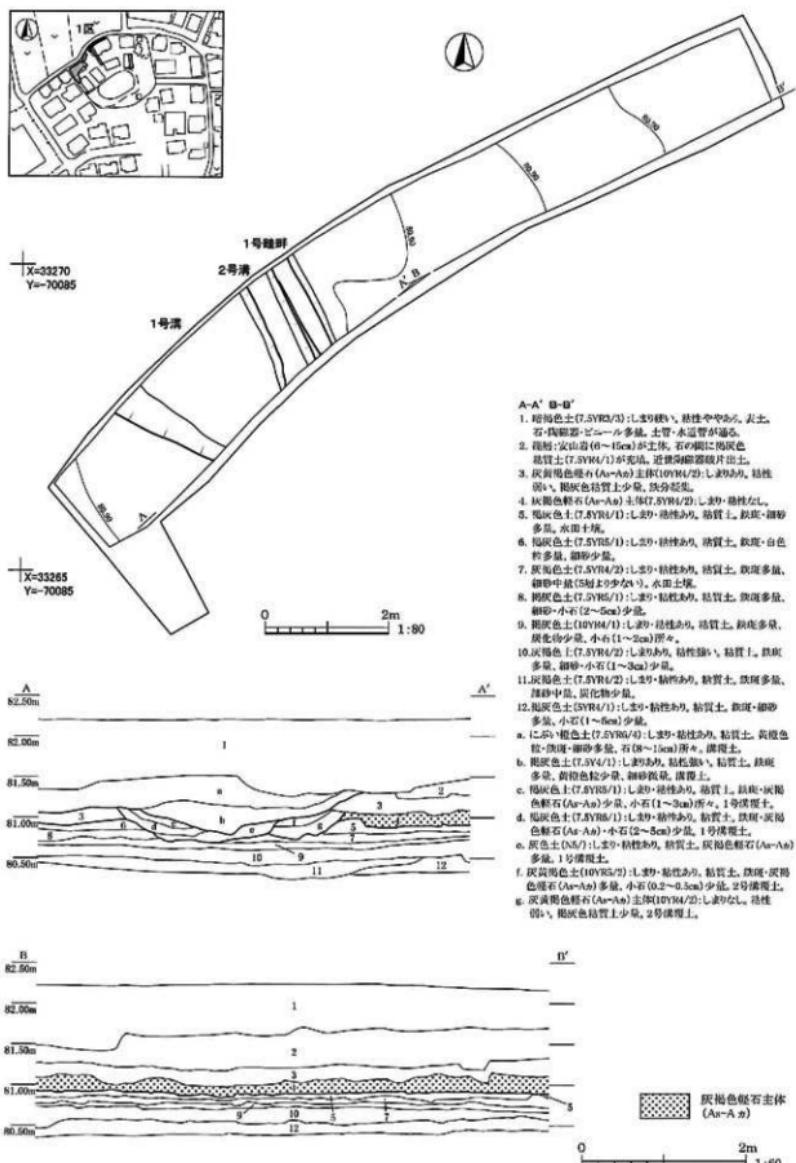
遺物出土状態: テラスと想定される箇所から円筒埴輪が出土した。2は傾いてはいるものの樹立しており、その脇から1の口縁部の破片がまとまって出土した。盛土中からは土師器片5点(甕・壺)が出土し、古墳時代前期～中期に帰属するとと思われる。また、旧表土中(土層断面A・B-28層)から土師器片13点(甕・壺)、黒曜石剥片1点が出土した。土師器は全て古墳時代前期に比定される。壺の比率が多いが、図示できたのは3のS字状口縁台付甕の台部のみである。

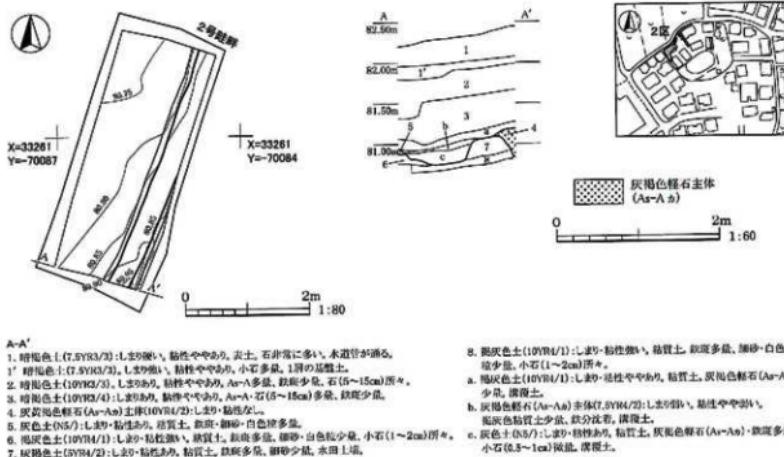
3 中近世

(1) 水田跡

1号畦畔(第18図)

位置: 1区の中央から西寄りに位置する。**重複:** 南西側を2号溝に切られる。**規模:** 上端幅26～60cm、下端幅45cm以上、高さ9～10cmを計測する。**走向方位:** 北西～南東方向で、N-29°-Wを指す。**地形:** 調査区内においてはほぼ水平であった。**水田面の状態:** 少多少の凹凸はみられたものの、概ねなだらかである。**耕作土:** 細砂を多量に含む褐灰色粘質土で、全体的に鉄斑が沈着している(土層断面A・B-5層)。**遺物出土状態:** 出土していない。**時期:** 中世溝(4号溝)の埋没後に耕作されていること、As-Aとみられる灰褐色鉱石で覆われていることから近世と推測される。





第19図 2号畦畔

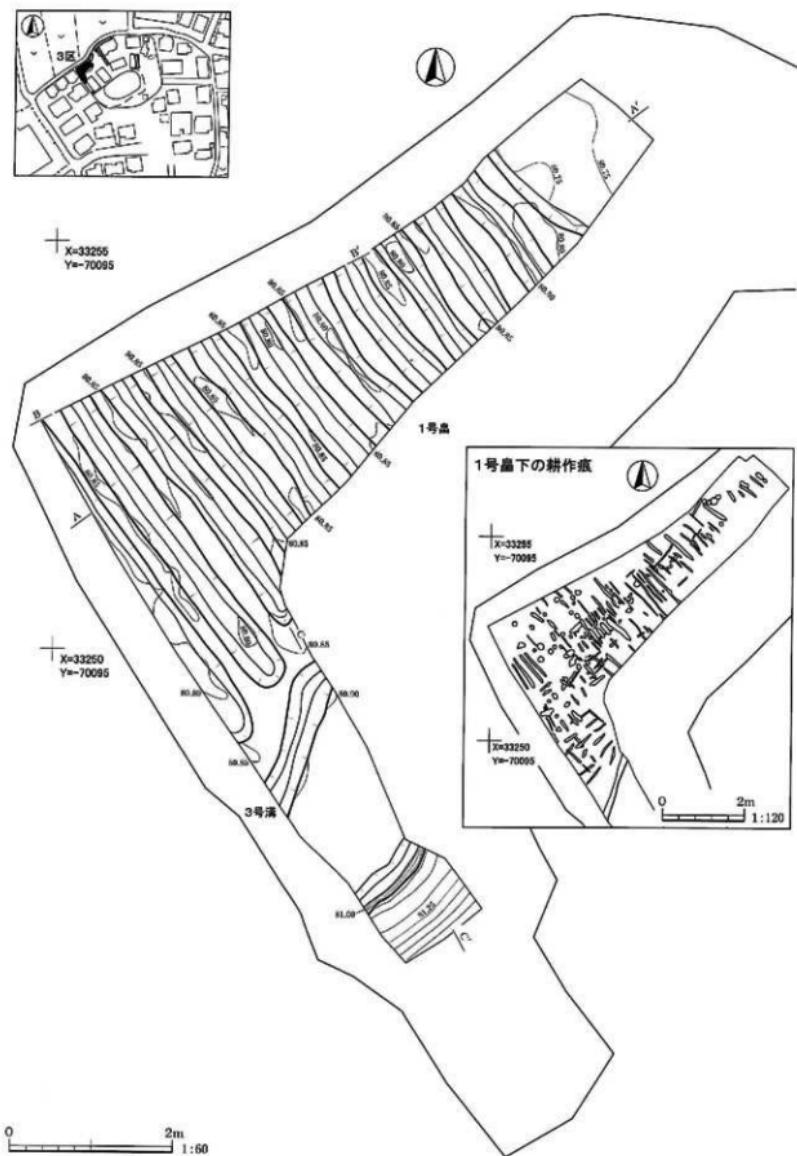
2号畦畔(第19図)

位置：2区の東壁際に位置する。規模：上端幅33～36cm、下端幅49～55cm、高さ20～26cmを計測する。走向方位：北東～南西方向で、N-21°-Eを指す。地形：調査区内においては、南東から北平へゆるやかに傾斜している。水田面の状態：多少の凹凸はみられたものの、概ねなだらかである。耕作土：細砂を多量に含む褐色粘質土で、全体的に鉄斑が沈着している（土層断面A-6・7層）。遺物出土状態：出土していない。時期：中世溝（4号溝）の埋没後に耕作されていること、As-Aとみられる灰褐色軽石で覆われていることから近世と推測される。

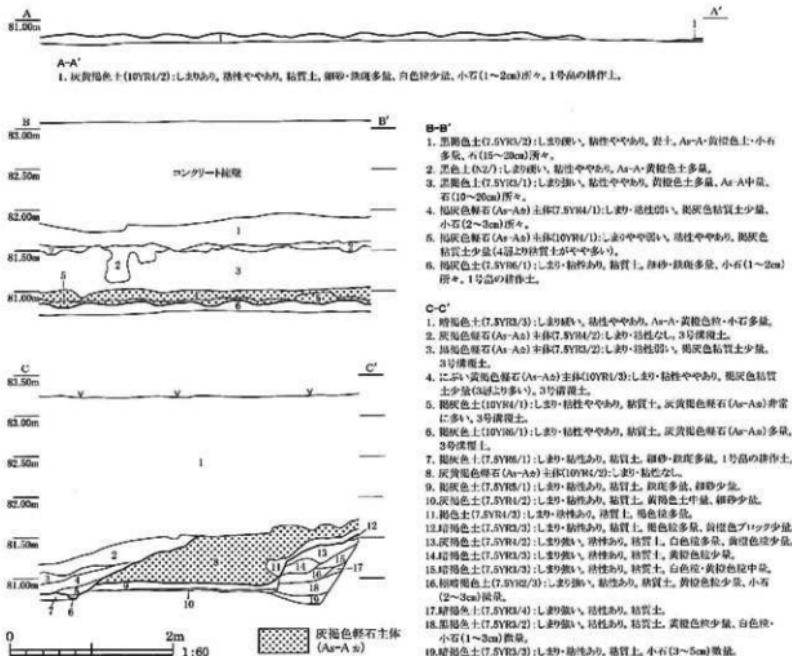
(2) 島跡

1号島(第20・21図)

位置：3区に位置する。地形：南西から北東へ向かって緩やかな傾斜がみられる。調査区内での比高は10cmである。規模：全容は不明だが、北東～南西方向に5.66m以上、南東～北西方向に4.65m以上である。ウネ・サク：サクは若干の蛇行はみられるものの、ほぼ直線的で等間隔に耕作される。サクの心々距離は52～65cmで、61～63cmが多い。サクとウネの高低差は1.9～5.2cmで、4.2～5.0cmが多く、やや崩れている。サクの走向方位は南東～北西方向で、N-36～37°-Wを指す。耕作土：細砂を多量に含む褐色粘質土で、鉄斑が沈着する（土層断面A-1層、土層断面B-6層）。耕作土の厚さは5～12cmである。遺構埋没状態：As-A埋入土に覆われている。土層断面観察から1回以上の転換が想定される。遺物出土状態：耕作土中から埴輪片3点、土師器片9点が出土した。時期：中世溝（4号溝）の埋没後に耕作されていること、As-Aとみられる灰褐色軽石主体層で覆われていることから近世と想定される。



第20図 1号畠 / 3号溝 (1)



第21図 1号品 / 3号溝 (2)

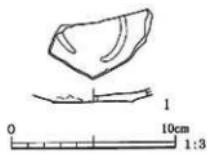
(1) 溝

1号溝 (第18・22図)

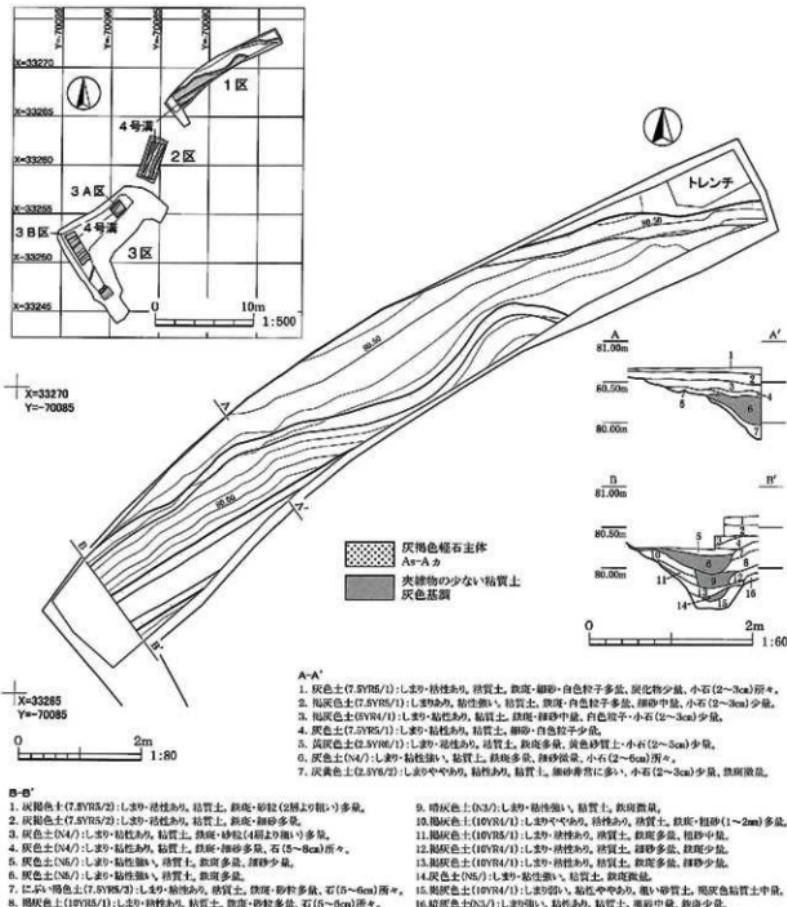
位置：1区東側に位置する。重複：2号溝と重複し、新旧関係は本溝が新しい。走向方位：南東-北西方向で、N-44°-Wを指す。規模：上端幅2.01~2.97m、下端幅1.57~2.23m、残存深度18~25cmを計測する。南東から北西へ向かって幅が広くなっている。断面形態：皿状を呈する。底面の状態：やや凹凸がある。遺構埋没状態：自然堆積と想定される。As-Aや小石を含む褐灰色粘質土が堆積する。遺物出土状態：底面付近から灯明皿(1)の破片が出土したのみである。時期：As-A混入土層で埋没していることから、近世と想定される。

第6表 1号溝出土遺物観察表

遺物名	遺物No.	形状	法集	①地成 ②色斑 ③粒度 ④現存	成・整面状況の特徴	備考
1号溝	1	陶器 灯明皿	口径 直径 (4.8) 底径 (9.6) 底深 (1/2)	①好成 ②赤褐色-黒赤帯斑、素面一皮 白 ③白色粒子	外側: ロクロ形状。底部削除部切り欠きナブ。鉄輪。 内面: ロクロ形状。鉄輪。見込み窓状況。 蓋部: 黄泥系。	1号溝底面付近。



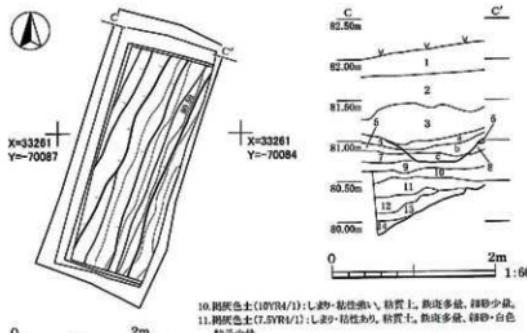
第22図 1号溝出土遺物



第23図 4号溝(1)

2号溝(第18図)

位置：1区東側に位置する。重複：1号溝・1号畦畔と重複し、新旧関係は1号溝より古く、1号畦畔より新しい。走向方位：南東-北西方向で、N-24°-Wを指す。規模：上端幅49cm以上、下端幅39cm以上、残存深度5~15cmを計測する。断面形態：不明。底面の状態：やや凹凸がある。遺構埋没状態：自然堆積と想定される。As-Aを多量に含む灰褐色粘質土が堆積する。遺物出土状態：出土していない。時期：As-A混入土層で埋没していることから、近世と想定される。



第24図 4号溝 (2)

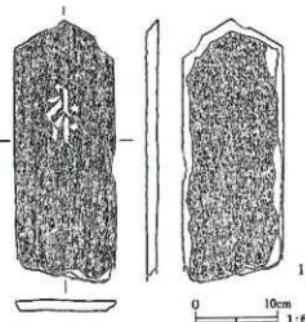
3号溝(第20・21図)

位置：3区の南東端、1号島の南側に位置する。走向方位：南西—北東方向で、N-21°-Eを指す。ほぼ直線的に走向する。規模：上端幅34～49cm、下端幅8～16cm、残存深度15～19cmを計測する。断面形態：皿状を呈する。底面の状態：やや凹凸がある。遺構埋没状態：自然堆積と想定される。As-Aを非常に多く含む褐灰色粘質土が堆積する。遺物出土状態：出土していない。時期：As-A混入土層で埋没していることから、近世と想定される。

4号溝(第23～26図)

位置：1区から3区にかけて検出された。走向方位：北東—南西方向へ蛇行して走向し、1区でN-59°-E、2区でN-26°-E、3区でN-51°-Eを指す。規模：全容は不明だが、下端幅は35～70cmを計測する。底面の標高は1区で79.50m、3A区で79.49m、3B区で79.39mで、北東から南西へ向かって標高を減じる。断面形態：下位では深い逆台形を呈し、上位からやや急傾斜で立ち上がりていく。底面の状態：平坦である。遺構埋没状態：褐灰色を呈す砂混じりの粘質土を基調とし、全体的に鉄班が沈着する。1区および3区の土層断面では、溝を掘り直した痕跡が観察された。掘り直し部分には、夾雜物がほとんどなく粘性が非常に

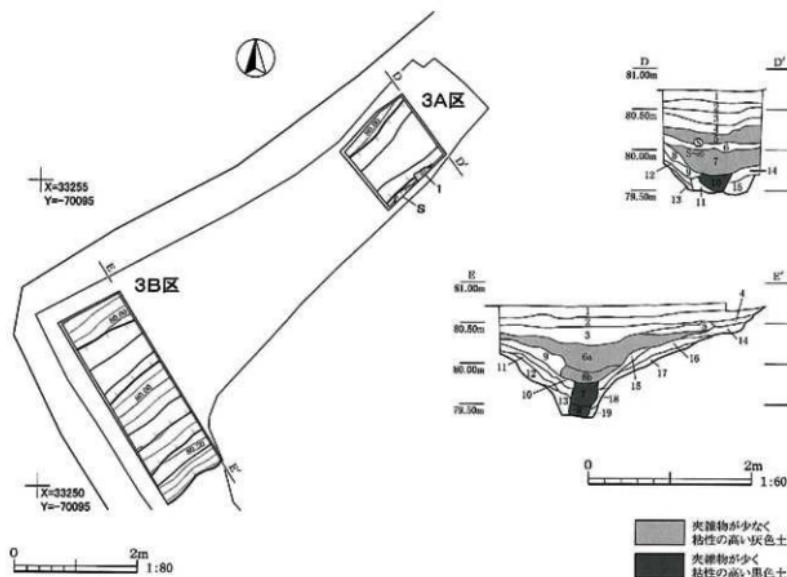
- C-C'
1. 塗褐色土 (7.5YIG2): しまり無い。粘性ややあり。石有常で多く、表土・水道管が埋まる。
 2. 塗褐色土 (10YR3/3) : しまりあり。粘性ややあり。
 3. 塗褐色土 (10YR3/1) : しまりあり。粘性ややあり。
 4. 塗褐色土 (7.5YR2/2) : しまり・粘性あり。粘質土。
 5. 塗褐色土 (7.5YR1/1) : しまり・粘性あり。粘質土。
 6. 塗褐色土 (7.5YR1/2) : しまり・粘性あり。粘質土。
 7. 塗褐色土 (7.5YR1/1) : しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑・白色粒多量。水道管上部。
 8. 塗褐色土 (7.5YR1/2) : しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑多量。細砂少量。2号明渠。
 9. 塗褐色土 (7.5YR4/1) : しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑多量。細砂・白色粒少量。小石 (1~2cm) 所々。
- a. 塗褐色土 (7.5YIG1) : しまり・粘性ややあり。粘質土。炭灰岩鉄班 (As-Aa) 少量。漂泥土。
- b. 漂泥色漂石 (As-Aa) 未体 (7.5YIG2) : しまり無い。
- c. 黒褐色漂石 (As-Aa) : しまり・粘性あり。粘質土。炭酸色漂石 (As-Aa) : しまり・粘性あり。粘質土。漂泥土。



第25図 4号溝出土遺物

第7表 4号溝出土遺物観察表

遺物名	遺物%	器種	法量 (ca. g) / 特徴	備考
4号溝	1	鐵牌	長さ: [22.6]、幅: 12.4、厚さ: 1.3、重さ: [1,000]。/ 鐵牌型鉄頭。種子「キリーア」。上・下端部欠損。	漂泥土上。



D-D'

- 褐色色土(SYR/1)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑・細砂多量。炭化物少量。白色柱状斑。小石(1~2cm)所々。上部には少く赤褐色SYR/4を含す。
1号 sondage土。
- 褐褐色土(SYR/2)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑多量。粗砂少量。石(5~8cm)所々。
- 深褐色土(7.5YR/3)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑多量。粗砂少量。石(3~6cm)所々。
- 暗褐色土(SYR/4)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑多量。粗砂少量。
- 灰色土(SYR/5)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。上部で板状出土。
- 暗褐色土(SYR/6)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。鉄斑少量。
- 暗褐色土(SYR/7)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑中度。鉄斑少量。石(7~8cm)所々。
- 褐色色土(5.5YR/8)：しまり・粘性あり。粘質土。細砂多量。鉄斑中度。
- 深褐色土(5.5YR/9)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。粗砂多量。
- 黑色土(N2/10)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。粗砂少量。
- 暗褐色土(N2/11)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。鉄斑少量。石(5~6cm)所々。
- 深褐色土(10YR/12)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑中度。
- 暗褐色土(10YR/13)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑少量。
- 褐色色土(N2/14)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑少量。
- 褐色色土(N2/15)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑中度。
- 深褐色土(N2/16)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑少量。
- 黑色土(N2/17)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑少量。
- 褐色色土(N2/18)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。

E-E'

- 1号 sondage土。D-D' 1層と同じ。
- D-D' 2層と同じ。
- D-D' 3層と同じ。
- 暗褐色土(5.5YR/3)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑少量。
- 深褐色土(5.5YR/4)：しまり・粘性あり。粘質土。鉄斑・細砂少量。
- 6a. 暗褐色土(N2/5)：しまりあり。粘性強い。粘質土。鉄斑少量。石(5~8cm)所々。
- 6b. 暗褐色土(N2/6)：しまりあり。粘性強い。粘質土。鉄斑少量。6a層より色が濃い。
7. 暗褐色土(N2/7)：しまりあり。粘性強い。粘質土。
8. 黑色土(N2/8)：しまりあり。粘性強い。粘質土。
9. 暗褐色土(5.5YR/9)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。小石(1~2cm)所々。
10. 黑色土(10YR/10)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑少量。
11. 暗褐色土(10YR/11)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑少量。
12. 黑色土(10YR/12)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑少量。
13. 暗褐色土(10YR/13)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑中度。小石(5~8cm)所々。
14. 褐色土(7.5YR/14)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑中度。小石(5~8cm)所々。
15. 黑色土(N2/15)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑少量。
16. 褐色土(N2/16)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。鉄斑中度。
17. 深褐色土(10YR/17)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂多量。鉄斑中度。
18. 黑色土(N2/18)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。
19. 黑色土(N2/19)：しまり・粘性あり。粘質土。粗砂少量。

第 26 図 4 号溝 (3)

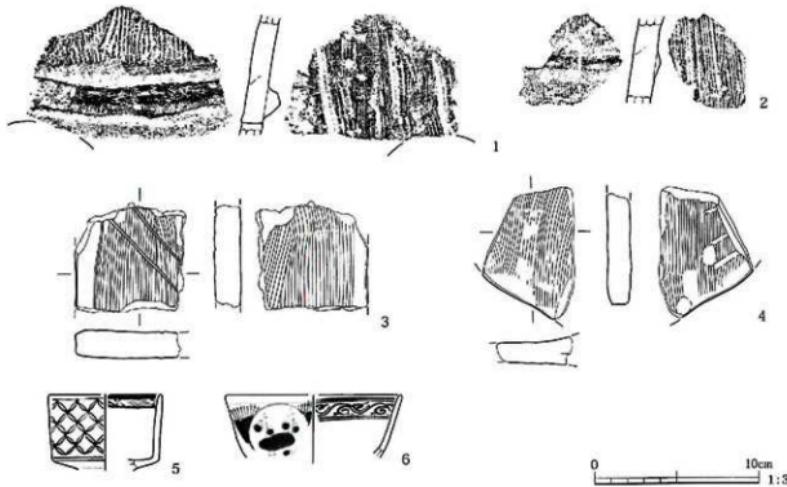
に高い黒色土が堆積している。遺物出土状態：1区覆土中から常滑甕片2点、3区覆土中から軟質陶器片1点（鍋）、板碑1点が出土した。常滑の甕は13世紀に比定される。板碑（1）は3A区の土層断面D-5層の上位から出土した。綠泥片岩製で、種子「キリーク」が刻まれている。板碑の脇からは大振りの安山岩が出土している。時期：出土遺物から中世と想定される。備考：溝の上位には水平堆積する層（土層断面A-1・2層、土層断面C-7層、土層断面D-E-1・2層）がみられ、水田土壤の可能性がある。土層断面C-a～c層はこれらの層を掘り込む溝で、覆土にAs-Aとみられる軽石を含むことから近世と想定される。

4 遺構外出土遺物(第27～30図)

ここでは、表探遺物および表上掘削中に出土した遺物について取り扱い、調査区分に掲載した。1区では埴輪片9点・須恵器片1点・土師器片2点・近世陶磁器片14点、2区では埴輪片4点、3区では埴輪片32点・土師器片5点・須恵器片2点・近世土器片1点・鉄製品3点・五輪塔の空風輪2点・墓石3点、4区では埴輪片5点、5区では土師器片2点・近世陶磁器片1点、6区では埴輪片2点・土師器片1点・近世陶磁器片3点、表探では埴輪片52点・土師器片5点・近世陶磁器片6点が出土した。

埴輪は円筒埴輪と形象埴輪が確認された。いずれも小破片で、全体を復元できる資料はない。胎土に結晶片岩を含むことから、生産地は藤岡地域と考えられる。円筒埴輪の外面調整は全て一次タテハケである。内面調整はタテ・ナナメハケ後一部ナデである。透孔は円形と推測され、突縁の形態は台形とM字形がみられる。7は口縁部の破片で、内面に「X」の線刻がある。35は底部調整が施され、板状工具の押圧痕が認められる。形象埴輪は器財埴輪の破片が確認された。3は盾形で、盾面の破片である。4は鶴形背板の破片と想定される。37の種類は不明である。なお、36は円筒の基底部であるが、底部径が小さく動物埴輪の脚部の可能性がある。土師器は高壺脚・壺・壺の破片で、古墳時代～古代に帰属する。須恵器は壺・壺の破片で古代に比定される。

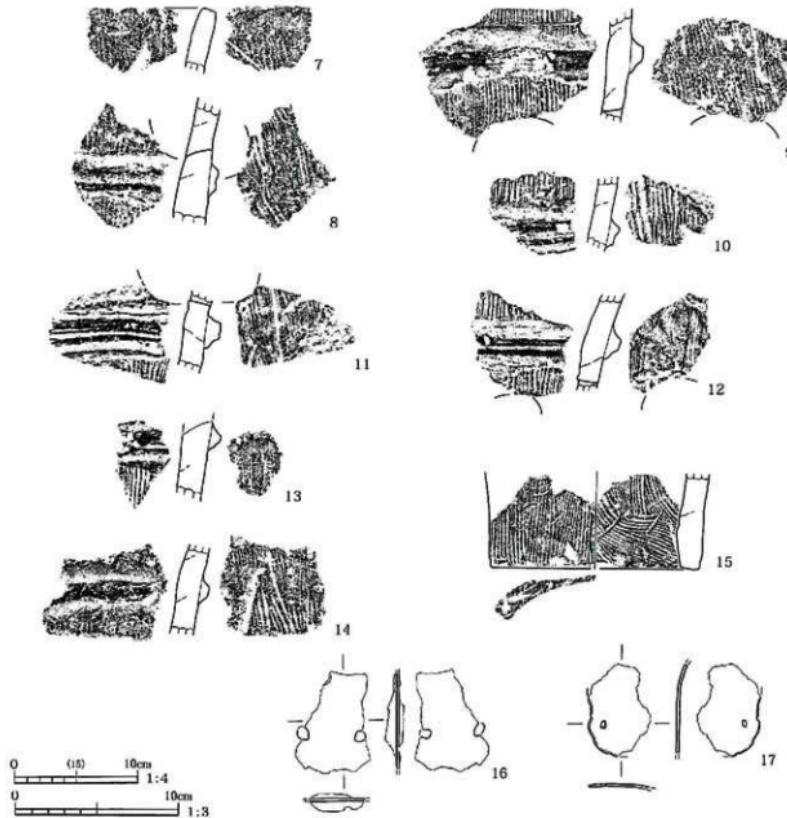
近世陶磁器の5・6は肥前系の染付碗で、1区の近世造成土と推定される層(第18図:土層断面A・B-2層)から出土している。空風輪は角閃石安山岩製で、18には表裏・側面に文字が刻まれている。断面形が扁平をなす特徴的な形態である。墓石は安山岩製で近世に比定される。20は花燈額に宝珠形の突起をもち、背面は舟形光背のような形態である。21は角柱塔で花燈額は楕円形である。明和6(1769)年の没年が刻まれている。22は角柱塔で花燈額は宝珠形の突起をもち、2段に深く掘り込まれる。



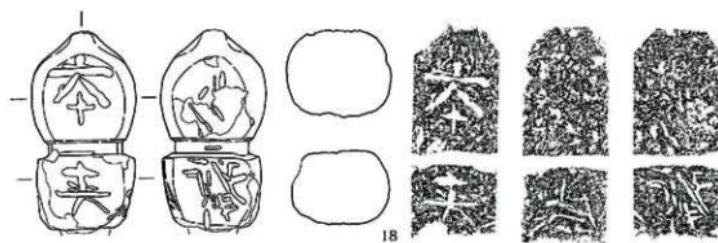
第27図 遺構外(1区)出土遺物

第8表 遺構外出土遺物観察表（1）

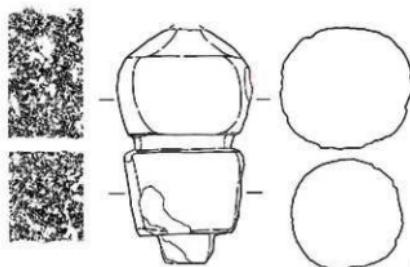
遺構名	遺物No.	断面	法値	①成形 ②色調 ③歯土 ④残存	成・盤形洗浄の特徴	備考
遺構外	1	円筒埴輪 底座	口径 底径 高さ	①良好 ②外一層、内一層 ③粘土片岩・朱四石・白色粒 ④表面無経	外面：尖部有孔。通孔あり、四面丸。タテハケ。ハケ目8本／2cm。 内面：タテハケ。ハケ目8本／2cm。	1区表土中。
遺構外	2	円筒埴輪 底座	口径 底径 高さ	①良好 ②外一層、内一層 ③粘土片岩・白色粒・黒色粒・赤色 ④表面無経	外面：尖部低い丸頭。タテハケ。ハケ目9本／2cm。 内面：タテハケ。ハケ目10本／2cm。	1区表土中。
遺構序	3	彫刻埴輪 底座	口径 底径 高さ	①良好 ②外一層、内一層 ③粘土片岩・白色粒・赤褐色 ④表面無経	厚さ1.6cmの粘土板。底面のヒレ状部分が残る。タテハケ後、2本1 単位のタテ刷毛洗浄をナメ方向に施す。縦向文。側面部に沿った 複数のヘラ痕が洗浄。側面部ナゲ。ハケ目12本／2cm。表面はタ テハケ・ナナカメ。ハケ目12本／2cm。側面部ナゲ。	1区表土中。
遺構外	4	彫刻埴輪 底座	口径 底径 高さ	①良好 ②外一層、内一層 ③粘土片岩・白色粒・赤褐色 ④表面無経	厚さ1.3～1.4cmの粘土板。欠損部全体に貼付される青板部分の粘片か。 タテハケ。ハケ目12本／2cm。側面部タテハケ。ハケ目12本／2cm。 漆喰状工具によるナリメ方向のナゲ。相間既。	1区表土中。
遺構外	5	器 小瓶	高さ 口径	①良好 ②外側一灰白、地一白 ③粘土 ④口徑部～体部1/8	ロクロ底面。半圓形。径付。透明板。肥厚系。 外面：七宝装文。 内面：四方斜面。見込み留継1条。	1区土蔵所面A・B +2層中。



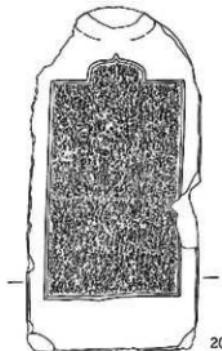
第28図 遺構外（3区）出土遺物（1）



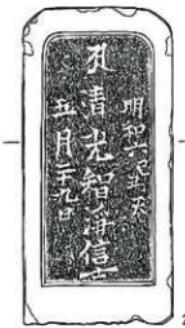
18



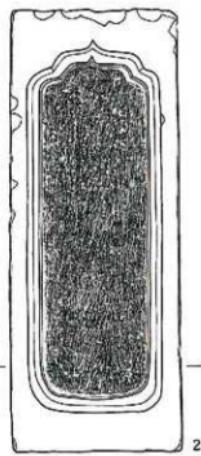
19



20



21



22

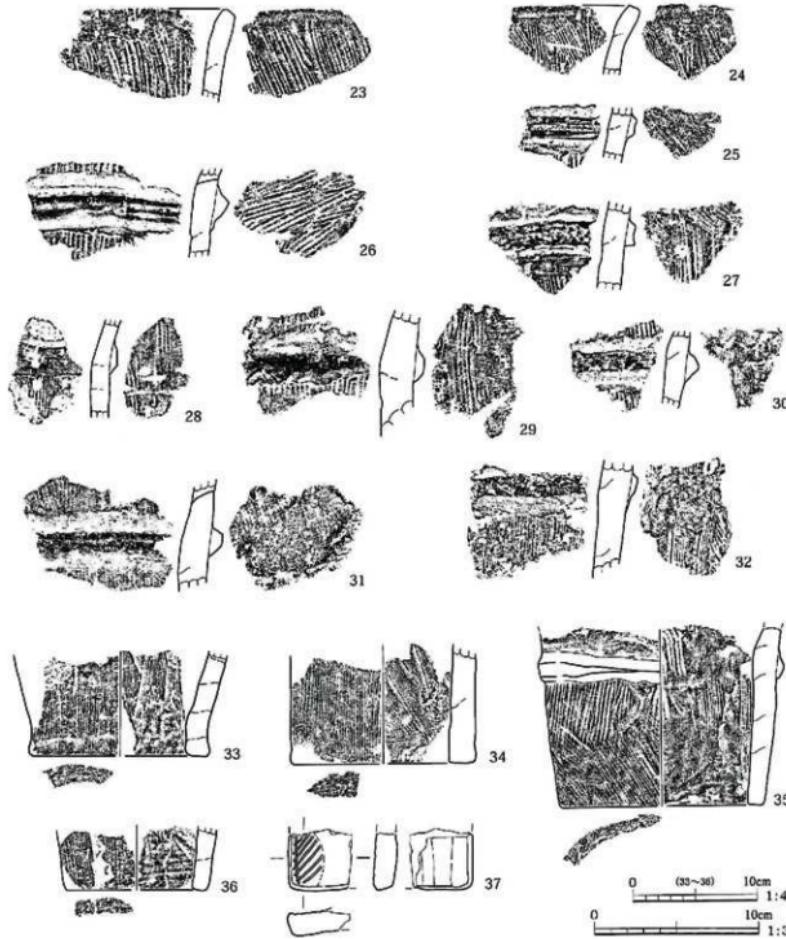


0 10cm
 0 (20~22) 20cm
 1:6 1:8

第29図 遺構外(3区)出土遺物(2)

第9表 造構外出土遺物觀察表(2)

道耕名	道耕%	種類	法量	成・熟性技術の特徴			備考	
				①地成	②色調	③土質		
道耕外	8	細葉輪 中輪	口徑 [10.5]、 厚度 [2.8]	◎良好・ ◎後熟・ ◎往來性・ ◎休耕	◎後熟・ ◎後熟・ ◎後熟	◎地成	ロクモ(後熟)、 サバシ(後熟)、 ヤマヒ(後熟)	1区・ 1区所断面B-C- 2層中。
道耕外	7	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：タケハケ、ロゴヨウカグ。ハケ目6本/2cm。 内表面：タケハケ後、ロゴヨウカグ。ハケ目6本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	8	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目7本/3cm。 内表面：タケハケ・ナメハケ。ハケ目7本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	9	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目7~8本/2cm。 内表面：タケハケ・ナメハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	10	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目7本/2cm。 内表面：タケハケ。ハケ目7本/2cm。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	11	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：サバヒ(後熟)。透孔あり。タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	12	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：サバヒ(後熟)。透孔あり。タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ後ナラ。ハケ日本不処理。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	13	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目9本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	14	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：タケハケ。透孔あり。タケハケ。ハケ目9本/2cm。 内表面：タケハケ。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	15	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：タケハケ。ハケ目6~7本/2cm。 内表面：ナメハケ。ハケ目6~7本/2cm。	3区土壌断面B-C- 層中。
道耕外	16	鉄輪	長さ: [9.25], 幅: [14.6], 高さ: [6.15], 重さ: [17.01], /板軸, 小2.2分軸, 構造歴久軸。					3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	17	鋸製品	長さ: [5.05], 幅: [3.1], 厚さ: [0.2], 重さ: [10.13], /板軸, 犀歴は反る。小孔1ヶ所, 犀歴久軸。					3区1号估計上支
道耕外	18	直輪	長さ: [25.05], 幅: 12.9, 高さ: [10.8, 重さ: [5.000], /角向岡安山房吉。表面艶および側面に薄岸。表面艶の側面形					3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	19	五輪空砲	長さ: [29.0], 幅: [16.65, 高さ: [15.0, 重さ: [5.000], /角向岡安山房吉。上部欠損。					3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	20	石造物	長さ: [6.67], 幅: 27.8, 厚さ: [13.1, /角向岡安山房吉。概形石造。頭部は三角形か。花被柱は実珠形で密をもつ。 頭部は三段みはで底へ。背面と舟形のよう形状。ノミによる加工跡。花被柱は密で底へ。頭部は丸柱形。					3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	21	石造物	長さ: [5.0, 幅: 24.2, 高さ: [12.3, /山形県鶴岡市鶴岡町。頭部は丸柱形。花被柱は密で底へ。頭部は三段みはで底へ。 頭部は三段みはで加工作。頭部は三段みはで底へ。ノミによる加工跡。花被柱は密で底へ。頭部は丸柱形。					3区土壌断面C-1 層中。
道耕外	22	石造物	長さ: [7.2, 幅: 27.7, 厚さ: [27.7, 高さ: [14.5, /角向岡安山房吉。舟形。花被柱は舟形で頭部をもつ。頭部は三段で底へ。 表面艶無し。上部・舟形ノリによる加工跡。頭部は丸柱形。					3区土壌断面C-1 層中。
道耕名	道耕%	種類	法量	①地成	②色調	③土質	特徴	備考
道耕外	23	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層赤	◎地成	外表面：タケハケ後。ロゴヨウカグ。ハケ目8本/2cm。 内表面：ナメハケ後。ロゴヨウカグ。ハケ目8本/2cm。	表記。
道耕外	24	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層赤	◎地成	外表面：タケハケ後ナメハケ後。ロゴヨウカグ。ハケ目14本/2cm。 内表面：ナメハケ後。ロゴヨウカグ。ハケ目12~14本/2cm。	表記。
道耕外	25	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ。ナメハケ。手植歴。	表記。
道耕外	26	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目6本/2cm。 内表面：ヨコケ。ハケ目6本/2cm。	表記。
道耕外	27	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目10本/2cm。 内表面：タケハケ。ハケ目10本/2cm。	表記。
道耕外	28	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目10本/2cm。 内表面：タケハケ。	表記。
道耕外	29	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ。	表記。
道耕外	30	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目8本/2cm。 内表面：タケハケ後ナラ。ハケ日本不該。	表記。
道耕外	31	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目8~9本/2cm。 内表面：タケハケ。	表記。
道耕外	32	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：安密M型。透通り。タケハケ。ハケ目10本/2cm。 内表面：ナメハケ後タケハケ。ハケ目10本/2cm。	表記。
道耕外	33	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層、内一層	◎地成	外表面：タケハケ。ハケ目11本/2cm。 内表面：タケハケ・ナメハケ。ハケ目11本/2cm。	表記。
道耕外	34	円筒輪幅	口徑	◎良好	◎外一層明赤、内一層	◎地成	外表面：タケハケ。ハケ目9本/2cm。 内表面：タケハケ・ナメハケ。	表記。



第30図 造構外(表探)出土遺物

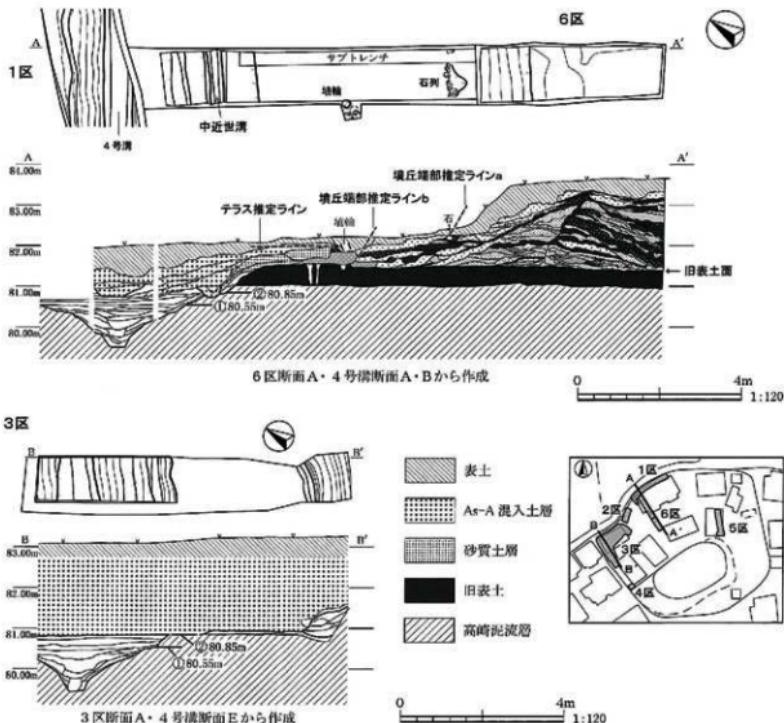
第10表 造構外出土遺物観察表(3)

遺物名	遺物No.	器種	特徴	成・整形技術の特徴	備考
造構外	35	円錐崩壊	口幅一 底幅(16.4) 厚さ(14.4) ③武部 1/6	①良好 ②外一端、内一側 結晶片岩・白色粒・黑色粒 底部板状工具による剥離。 内面: タチハケ。ハケ目6本/2cm。	表探。
造構外	36	円錐崩壊	口幅一 底幅(11.3) 厚さ(5.3) ③底幅 1/6	①やや粗直 ②外一端、内一側 結晶片岩・白色粒・黑色粒 底部板状工具による剥離。 内面: タチハケ。ハケ目8本/2cm。下端部に横板状工具による剥離。 形状沿継の可能性あり。	表探。
造構外	37	形態崩壊	口幅一 底幅一 厚さ ③結晶片岩・白色粒・赤褐色 ④破片	刃長 1.3cm の柱状。ナゲ後、ヘラ彫き比喩により、幅度→斜度の 所で定義。ナゲ前、ヘラ彫き比喩は表面部分。裏面一方斜のナゲ。	表探。

V まとめ

・ 墳丘形態について（第31・32図）

今回の調査では、3区および6区で墳丘主軸に概ね直交する土層断面を観察することができた。墳丘から周堀まで通して確認できたが、後世の削平により墳壠の正確な位置を知ることはできなかった。そこで、地山の高崎泥流層で確認できた墳丘立ち上がりの位置をもとにして、周堀傾斜面のコンタの走行方位、さらに吉澤学氏の提示した墳丘復元線（吉澤 2005）を参考に墳形の検討を試みた。第31図をみると、地山での墳丘の立ち上がりは3区では①標高80.55m、6区では②標高80.85mの位置が適当と考えられた。しかし、30cmの比高差が生じたため、それぞれ同じ標高値の位置を断面図に割り当てた。これを見ると、①では6区でやや周堀の内側に入り込んでしまうため、②の位置で推定し第32図に示した。3区は前方部端部となり、後円部の推定線は吉澤氏の想定する墳端ラインよりやや内側に入る。これをもとに後円部径を復元すると、径約42mと推定される。



第31図 断面模式図

墳丘部分については、6区は表土によって削平されるのみで、断面形態はおおよそ古墳本来の形状を現していると考えられ、付け基壇もしくはテラスをめぐらせてている可能性が高い（第31図）。テラスと墳丘端部との境は、石列の確認された箇所（墳丘端部推定ラインa）ないし、埴輪南側で盛土単位が一度切れた付近（墳丘端部推定ラインb）と想定される。さて、この埴輪は原位置を留めていると考えられ、埋置された基底部下の標高は81.88mである。これに基底部の段間値13cmを足すと標高82.01mとなり、この標高82.0m前後にテラス面の標高が求められると推測される。

葺石の有無については、墳丘斜面が削り取られているため確証は得られない。しかし、『群馬県遺跡台帳II（西毛編）』に葺石の記載があり、かつては墳丘南～西斜面に大工程の河原石が夥しく集中し、膨大量の石が周辺宅地内を含めて隨所に散乱していた（吉澤2005）ことから、墳丘斜面に葺石が施されていた可能性は高いと思われる。なお、6区で検出された石列は墳丘内に埋設するものである。墳丘面と平行して並び、石の長側面が外側を向いているため、葺石根石の可能性が考えられた。しかし、石の規模が小さく設置レベルも不揃いであり、積極的に肯定するには至らなかった。

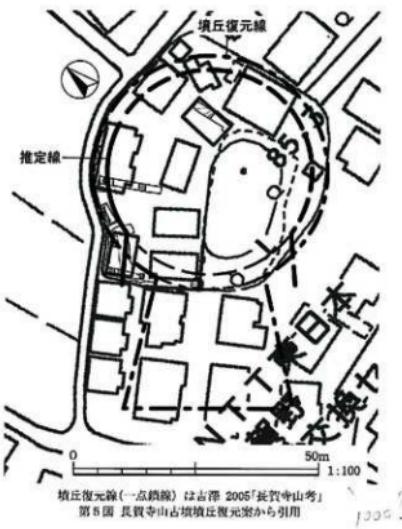
・墳丘盛土の構造について（第33図）

5・6区で墳丘盛土の断ち割り調査を行った結果、旧地表である黒色土の上面から盛土して、墳丘を築造していたことが判明した。旧表土の標高は5区で81.29m、6区で81.40mとなり、北西から南東側へ向かって緩やかに下がっていく。5区の南側には削平を免れた墳丘が遺存しており、5区現地表面からの高さは約3mを計測する。標高は約86.6mとなり、旧表土の上に5m以上の盛土を施していたことが明らかになった。

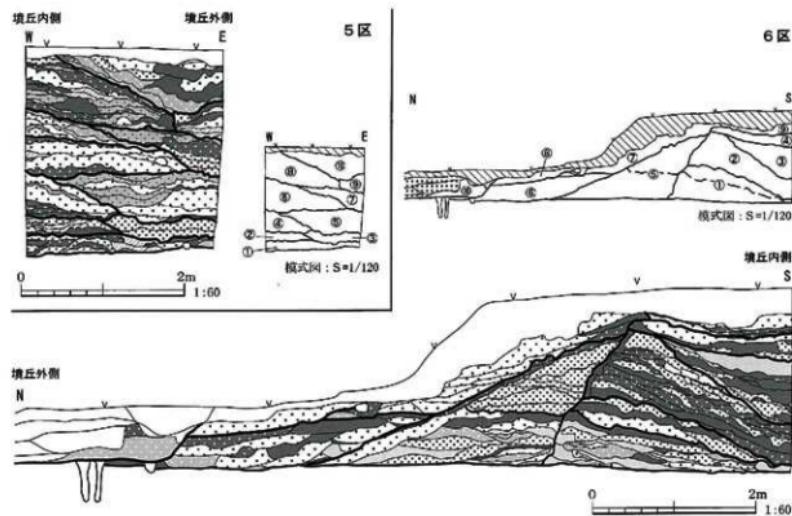
盛土は基本的に旧表土由来の黒色系の土と、高崎泥流層由来の黄色系の土を互層にして構築されている。盛土の厚さは3～25cmで、薄いものから厚いものまで様々であるが、相対的に黒色系の方が薄い。土の色調の差異や土を盛った角度から、大まかな施工単位を捉えることができた。以下、区ごとに記述する。

5区は後円部の北東側に位置する。土層断面は墳丘主軸に近く南壁で観察し、西側が墳丘内側、東側が墳丘外側となる。盛土は大きく10単位に分かれ。旧表土の上には①が高さ10～27cmほど盛土される。その後、墳丘内側から外側へ傾斜する盛土②を形成し、その外側に上面が概ね水平になるよう盛土③を付け足す。この傾斜面をもつ盛土とその外側に付けられる盛土を一つのまとまりとして、これを上方へ繰り返している。組み合わせは、②・③（高さ15～26cm）、④・⑤（高さ53～60cm）、⑥・⑦（高さ44～75cm）、⑧～⑩（高さ77cm以上）となる。盛土は各単位とも水平積みを基調として形成される。なお、②・④・⑤・⑧の傾斜面の角度は20°～30°の範囲に収まる。

6区は後円部の北側に位置する。土層断面は墳丘主軸に概ね直交する東壁で観察し、南側が墳丘内側、北側が墳丘外側となる。盛土は大きく10単位に分かれ。旧表土の上に①～④をまとまりとした盛土が形成



第32図 墳形推定図



第33図 盛土単位模式図

される。墳丘内側から外側へ急傾斜する法面をもち、法面角度は 58° 、高さは最高185cmを計測する。①・②は墳丘外側から内側へと傾斜して盛土され、③の法面には黒色土が施される。④・⑤は水平積みを基調としている。こうして形成された①～④の外側に⑥が付け足される。⑦は墳丘内側から外側へ斜めに下がる盛土で、法面角度は 23° である。水平積みを基調とし、土の種類は下部（褐灰色土と明黄褐色土の互層）と上部（明黄褐色土のみ）で大きく異なる。また、法面には②と同様に黒色土が施される。⑧の外側に⑨・⑩を拡張し、さらにその外側に⑪を付け足す。①～④の上には⑫が盛られる。

埴輪について

円筒埴輪と形象埴輪が確認された。円筒埴輪の中には朝顔形埴輪の可能性がある破片も認められる。全体を復元できる資料はないが、6区2の存在から段構成は少なくとも2条3段以上といえる。口縁部を復元できたのは6区1のみで、推定口径は24.8cmである。底部は推定底径14cm台と17cm前後のものがある。段間値は、基底部で11.2cmと13.0cm、基底部の上段で9.4cm、口縁部で9.1cmを計測する。

口縁部は緩やかに外反し、端面が平坦なものと、中央が浅く窪むものがみられる。突帯の断面形態は台形およびM字形で、高いものと低いものがある。透孔は円形と推定される。調整は外面一次タテハケのみ、内面タテ・ナナメハケ後一部ナデである。ハケの本数は2cm幅の間で、6本、7本、8本、9本、10～11本、12～14本の6種類が確認された。7本が最も多く、8本がこれに次ぐ。底部調整（造構外35）やヘラ記号（造構外7）も確認された。色調・焼成は、橙色系で粉っぽくやや軟質のものと、橙色系でやや硬質なもの、褐色系で硬質なものに大別される。胎土には結晶片岩が含まれ、白色針状粒が観察できたもの（2区1）もある。また、赤褐色粒の目立つ個体も確認される。これらの含有物から生産地は藤岡地域と想定され、胎土、焼成度合、ハケ本数、突帯形状などの要素から、複数系統の存在が予想される。

形象埴輪と確実に判断できたのは3点（遺構外3・4・37）のみである。遺構外3は2本1単位の斜方向のヘラ描き沈線がみられ、盾形埴輪の一部と想定した。盾面右側（盾に向かって左側）のヒレ状部分であろう。遺構外4は翻形埴輪の一部、矢筒本体に貼付される背板の右側部分と想定される。遺構外37は種類は不明だが、器財埴輪と考えられる。3点とも橙色を呈しやや硬質で、胎土には結晶片岩が含まれる。

・製造年代

古墳に伴う土師器や須恵器が出土していないため断定できないが、埴輪は円筒埴輪の外面調整が一次タテハケのみであること、底部調整がみられること、突堤が扁平化することから川西編年のV期（川西1978）にあたり、古墳時代後期後半の製造と考えられる。

・倉賀野東城について（第34図）

中世になると、本古墳の墳丘を利用して堀をめぐらせた倉賀野東城が築かれる。1～3区で検出された4号構は、出土遺物から中世と想定される。溝の走向は上記にある通り墳丘面に沿うように屈曲しており、検出位置も網張り図の堀の位置と合致することから、倉賀野東城の堀と想定される。

倉賀野東城は、本古墳から西に約250mの位置にある倉賀野町を守る外堀で、築城年代は16世紀とされる。堀はほとんど消滅してしまったが、昭和30年代まで細長い水田となって良く残っていたようである。



第34図 倉賀野東城

参考・引用文献

【高崎市教育委員会】

池田 敏 1999『倉賀野東城遺跡（倉賀野条里VI遺跡）』

池田 敏 2001『倉賀野条里I・II・III・IV・V遺跡／倉賀野上福荷前（I・II・III・IV・V）・三坊木（I・II）遺跡』

小泉義明ほか 2001『下之城村前II・倉賀野上新塚I遺跡』

小林朋志 2010『古賀野東上正六遺跡』

齋藤寛方ほか 2006『下佐野一本木遺跡』

忠田 登ほか 1996『下中居条里遺跡』

關口 修ほか 1998『高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報』

高橋 純ほか 2003『下之城村前V遺跡』

高橋 純ほか 2004『下之城津沖跡』

水谷貴之 2009『下佐野長者屋置跡』

吉田昌利 1998『下中居条里遺跡II』

吉田昌利 2002『下之城村前IV遺跡』

吉田昌利ほか 2006『倉賀野駅北I・II・III・IV・V・VI遺跡』

【高崎市遺跡調査会】

奥富雅之ほか 1996『倉賀野中里前遺跡』

關口 修ほか 1992『上佐野舟橋跡』

關口 修ほか 1994『倉賀野万福寺II遺跡発掘調査報告書』

長井正欣ほか 1995『大曾根I・II遺跡』

平岡和夫ほか 1983『倉賀野万福寺遺跡』

【高崎市史編さん委員会】

高崎市史編さん委員会 2003『新編「高崎市史」通史編I 原始古代』

高崎市史編さん委員会 1999『新編「高崎市史」資料編I 原始古代I』

高崎市史編さん委員会 2000『新編「高崎市史」資料編II 原始古代II』

高崎市史編さん委員会 1996『新編「高崎市史」資料編3 中世I』

高崎市史編さん委員会 2003『新編「高崎市史」資料編4 社會』

【高崎市市史編さん委員会】

緑部得一 2002『高崎市における近世墓石の総年』『高崎市史研究』16
栗原甲子郎ほか 2002『倉賀野東古墳群大道南群調査報告（上）』『高崎市史研究』15

斎江秀夫ほか 2002『倉賀野東古墳群大道南群調査報告（中）』『高崎市史研究』16

栗原甲子郎ほか 2003『倉賀野東古墳群大道南群調査報告（下）』『高崎市史研究』17

【財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団】

井川達雄ほか 1989『下佐野遺跡』

井川達雄ほか 1989『舟橋跡』

女鹿と志郎ほか 1986『下佐野遺跡II地区』

【その他】

青木 敏 2003『古墳施造の研究』六一書房

泉森 敏 1983『土の積み方と砾石の敷き方』『季刊考古学』第3号

越山園 今高康宏 2016『府附・高崎市天神町所在「延神草原古墳」』『たかつきの歴史をたどる』高崎市立今坂環古代歴史館

梅澤成昭 1990『群馬県地域における前方後円墳I』『群馬大学教育学部紀要』人文・社会学系第14号

江浦 洋ほか 1998『群馬古墳』（財）大阪府文化財調査研究センター・川西聖宏 1974『円筒埴輪論』『考古学雑誌』64巻2号 日本文古学会

小林孝秀ほか 2008『山名伊勢古墳』寺修大学文学部考古学研究室

群馬縣 1938『上毛古墳總覽』

群馬県教育委員会 1972『群馬県遺跡台帳II（西毛編）』

土生田純之・右島和夫ほか 2003『古墳佛塔の從元的研究』雄山閣

山崎一 1984『文献による倉賀野史・第一卷（城砦編）』倉賀野歴史会

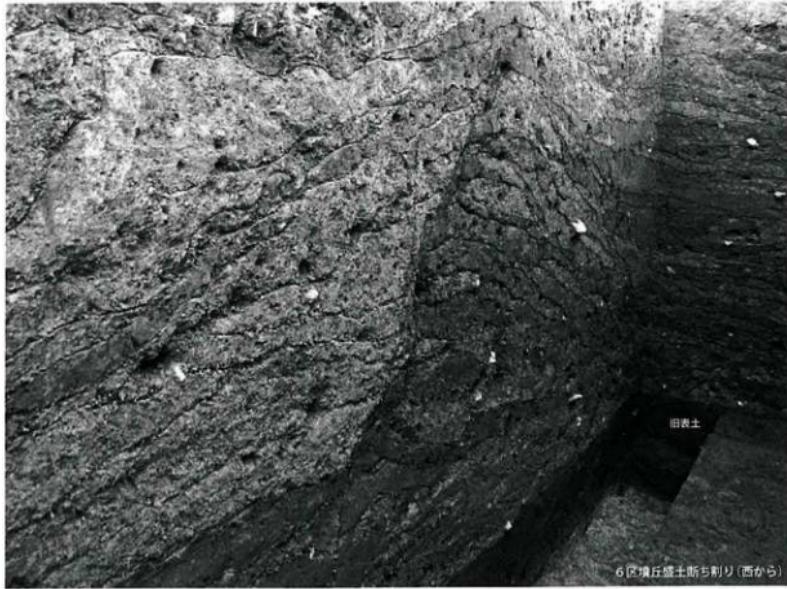
吉澤 學 2005『長賀寺山古跡』『東京史論』第20号 群馬考古学研究会

報告書抄録

フリガナ	クラガノチヨウガジヤマコフン
書名	倉賀野長賀寺山古墳
副書名	長盤住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第350集
編著者名	小根澤雪絵 大野義人 有山徑世
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 Tel 027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	平成27年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
倉賀野長賀寺山古墳	群馬県高崎市 倉賀野町子橋東 1951番2、1951番 5	102020	617	36° 17' 50"	139° 3' 11"	2014.12.12 ~ 2015.02.02	約 124.3 m ²	長盤住宅建設
所収遺跡名								
倉賀野長賀寺山古墳	古墳 城館 生産域	古墳時代 中近世	古墳 溝 水田畦畔 畠	1基 4条 2条 1ヵ所	埴輪（円筒・形象）、 土師器、須恵器、 陶磁器、鉄製品、 板碑、五輪塔、墓石	倉賀野長賀寺山古墳について 後円部埴丘・周堤の一帯をト レンチ状に調査。 古墳周囲内から倉賀野東城の 堤と想定される溝を検出。		

写 真 図 版

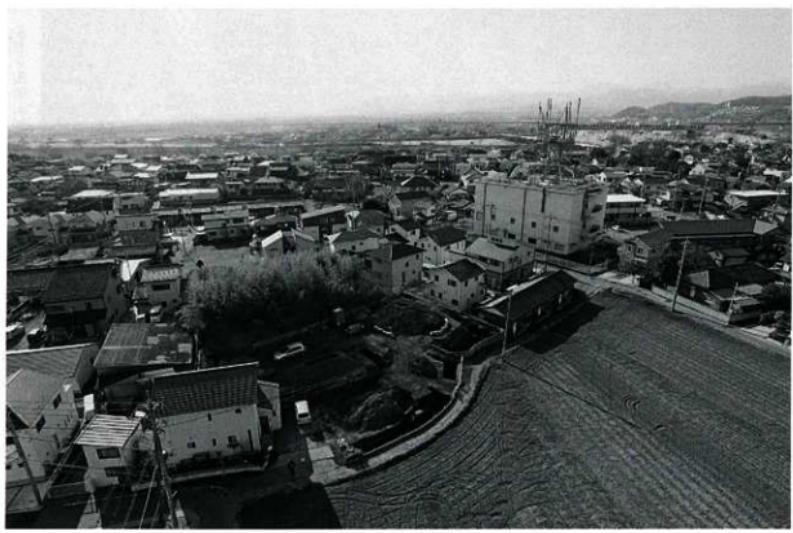




遺跡の位置と周辺の地形（昭和 22 年米軍撮影空撮写真）



遺跡遠景1（北西から）



遺跡遠景2（北東から）



遺跡全景（上が北）



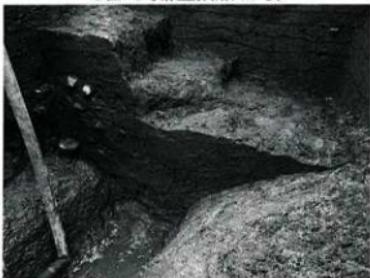
1区 全景(北東から)



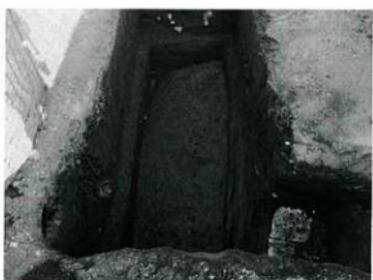
1区 4号溝全景(南西から)



1区 調査状況(南西から)



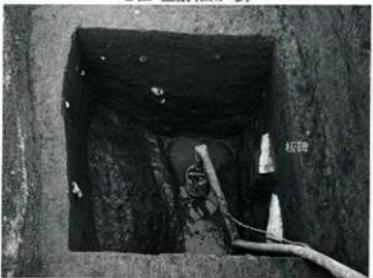
1区 4号溝断面(北東から)



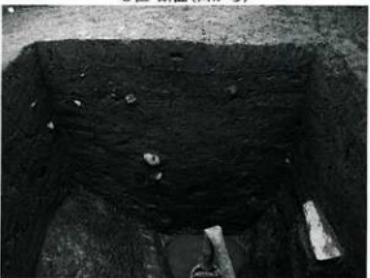
2区 全景(西から)



2区 断面(西から)



3 A区 4号溝全景(西から)



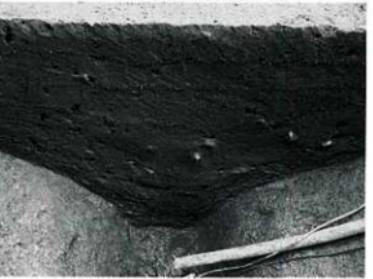
3 A区 4号溝断面(西から)



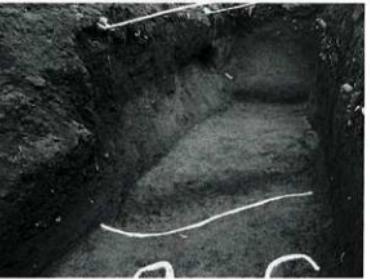
3 B区 4号溝全景(南東から)



3 B区 近景(北西から)



3 B区 4号溝断面(西から)



3区 3号拂付近全景(北西から)



5区 墓丘盛土検出状態(南から)



5区 旧表土検出状態(西から)



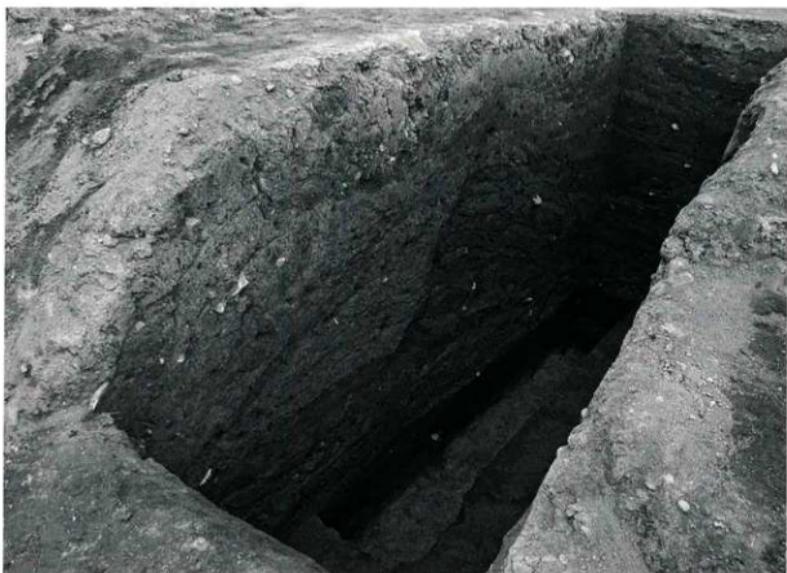
5区 墓丘盛土断面(北東から)



6区 墓丘盛土検出状態(南東から)



6区 旧表土検出状態(南東から)



6区 填丘盛土断面1(北西から)



6区 填丘盛土断面2(北西から)



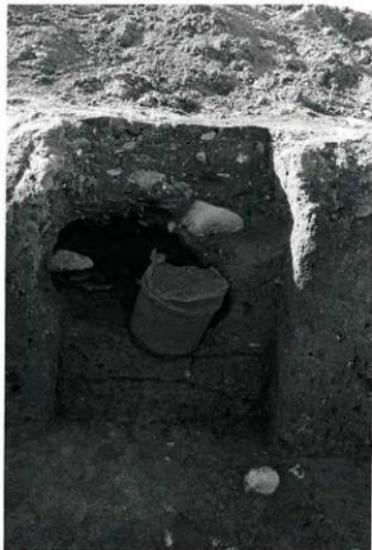
6区 填丘盛土断面3(南西から)



6区 填丘盛土断面4(西から)



6区 填丘盛土断面5(西から)



6区 填縫検出状態(東から)



6区 周堀全景(西から)



6区 石列検出状態(北から)



1区 壁面(南西から)



2区 2号哇畔全景(西から)



3区 1号哇全景(北西から)



3区 1号哇断ち割り断面(南西から)



1 区出土遗物



2 区出土遗物



6 区出土遗物



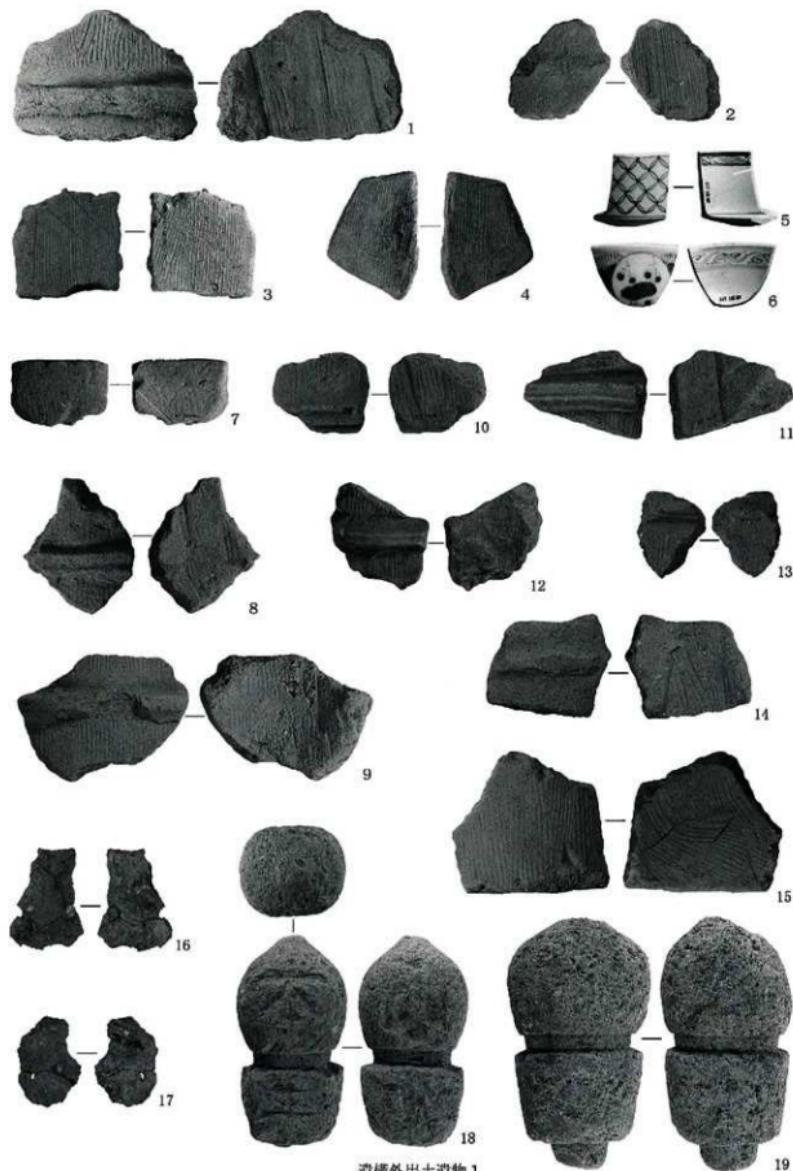
3 区出土遗物



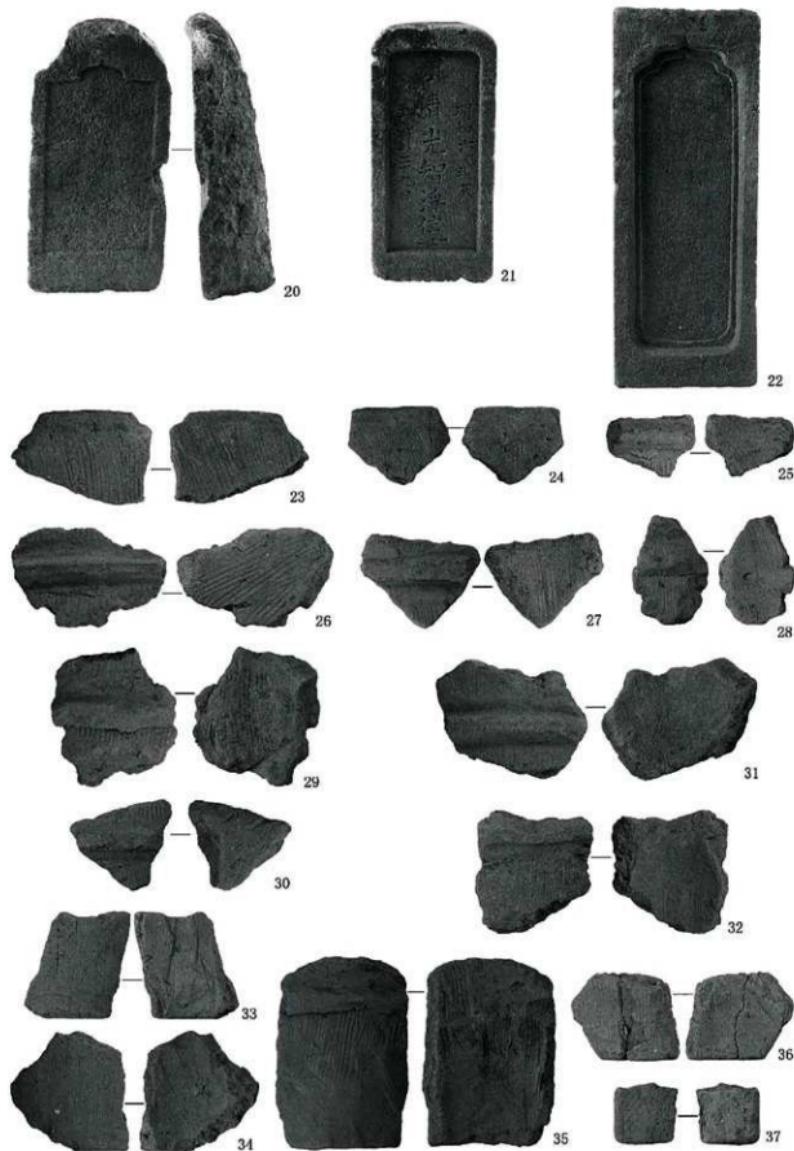
1 号沟出土遗物



4 号沟出土遗物



遺構外出土遺物 1



造構外出土遺物 2

高崎市文化財調査報告書第350集

倉賀野長賀寺山古墳

—長温住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成27年6月23日印刷

平成27年6月30日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社

